

シンポジウム

令和元年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム

（令和元年十二月二十一日〈土〉午後一時三十分～五時三十分 於皇學館大学 二号館三三一教室）

皇位継承を考える

〔基調公演〕

所

功氏

（本学特別招聘教授・京都産業大学名誉教授）

〔発題〕

岡

田

莊

司氏

（國學院大学名誉教授・同大学院客員教授）

藤

森

馨氏

（国士舘大学教授・同大学院教授）

〔司会〕

佐

野

真

人氏

（当センター助教）

シンポジウム

令和元年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム

(令和元年十二月二十一日(土) 午後一時三十分～五時三十分 於皇學館大学 二号館三三二教室)

皇位継承を考える

〔基調公演〕 所 功氏 (本学特別招聘教授・京都産業大学名誉教授)

〔発題〕 岡 田 莊 司氏 (國學院大學名誉教授・同大学院客員教授)

藤 森 馨氏 (国士舘大学教授・同大学院教授)

〔司会〕 佐 野 真 人氏 (当センター助教)

〔開会〕

【佐野真人】 本日は、年末の押し迫ったところ、多数ご参集を賜りまして、誠にありがとうございます。ただ今より、令和元年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム「皇位継承を考える」を開催させて頂きま

す。開催に先立ちまして、研究開発推進センター長の太島信生より挨拶申し上げます。

【太島信生】

本日は、令和元年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウムにご来場賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。私は、研究開発推進センター長の太島と申します。どうぞよろしく願います。この研究開発推進センターには、神道研究所・史料編纂所・佐川記念神道博物館という三つの柱となる機関がありまして、それぞれに活動を展開しております。

本日、佐川記念神道博物館の天皇陛下御即位記念特別展「即位礼と大嘗祭」が、無事に最終日を迎えることができました。多くの方々にご来場頂きましたこと、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

さて、神道研究所の活動は、総合研究と部門別研究に分かれております。総合研究のほうでは、皇室祭祀・神宮祭祀、また部門別研究では、第一部門神道思想、第二部門祭祀、第三部門神道史、第四部門宗教・民俗、第五部門文学・芸術といった五つの部門研究を行っております。そして、春学期には公開学術講演会を、秋学期には公開学術シンポジウムを開催しております。

本日のシンポジウムは、「皇位継承を考える」というテーマで行われます。本年五月一日に天皇陛下が第一二六代の天皇として御即位になられ、元号も「令和」と改められました。この機会に皇位継承について考えることは、誠に意義のあることだと思えます。本日はこの問題につきまして、第一線で活躍の本学特別招

聘教授・京都産業大学名誉教授・モロロジ研究所教授の所功先生、國學院大學名誉教授・同大学院客員教授の岡田莊司先生、国士館大学教授・同大学院教授の藤森馨先生からお話を頂戴することになっております。なお司会は、本学研究開発推進センターの佐野真人助教にお願いしております。

本日は長時間のシンポジウムを予定しておりますが、会場の皆様におかれましては最後までどうぞよろしくお願い致します。以上簡単ではありますが、ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

【佐野】大島センター長、ありがとうございます。続きましては、私の方から、本日の開催趣旨並びにパネリストのご紹介、及びスケジュールの確認をさせていただきます。

開催趣旨でございますが、先ほどのセンター長の挨拶にもありましたように、本年五月一日に天皇陛下が御即位になりました。今回の御即位は譲位によるもので、二〇二年ぶりに譲位による皇位継承が行われました。この時にあたりまして、どのような儀礼がおこなわれるかということが非常に注目されてまいりました。新しく退位の礼など様々な儀礼が新設されたというのは周知とおりでございます。その中でも最も重要な儀式は、十月二十二日に挙行されました即位礼正殿の儀と十一月十四日の夕刻から十五日の未明にかけて挙行されました大嘗祭でございます。

即位礼正殿の儀は、即位された天皇が、日本の国内外にその即位を宣言される儀式であり、大嘗祭は、即位された天皇が初めて行う新嘗祭でございます。ただし、この儀式は、中世には延引、あるいは大嘗祭そのものが停止されたりもしておりました。しかし、儀礼の内容など江戸時代に復興されまして、今日まで続いてきております。

また、古代から連綿として受け継がれている「皇位」そのものの継承を考えるときに、日本の国民だけでなく、世界からも注目を浴びております。

今回このシンポジウムを開催するにあたりまして、いろいろと次代への課題なども明らかになっていることも事実であります。それを改めて確認した上で、歴史事実から、どのように今後の皇位継承の儀礼を行っていく必要があるのか。皇室祭祀、とりわけ大嘗祭の研究をしております神道研究所としては重要なテーマでございます。そこで、本日三人の先生にお願いした次第であります。

実は、三人の先生には、三年ほど前からお願いをしておりました。平成二十八年八月の上皇陛下の「象徴としてのお務めについて」というおことば、その後の皇室典範特例法の制定など、皇位継承が行われることが確定したときに、先生方に天皇陛下御即位の年の年末にシンポジウムを開催することをお願いし、ご快諾をいただいております。

最初にお話しして頂きますのは、基調講演といたしまして、所功先生でございます。先生は、昭和十六年岐阜県のお生まれで、名古屋大学大学院文学研究科修士課程を修了後、慶応義塾大学で法学博士を取得されております。現在は、本学特別招聘教授・京都産業大学名誉教授・モロロジ研究所道徳研究センター教授・麗澤大学客員教授などをお勤めでございます。先生の御業績は、皆さんもご存じかと思いますが、皇位継承の儀礼についてテレビにも出演され、注目されている先生でございます。今回は、皇位継承あるいは神宮、年号に関する御業績を中心に掲げさせていただきます。

次に、國學院大學名誉教授の岡田莊司先生にご発題をいただきます。先生は、昭和二十三年神奈川県のお生まれで、國學院大學大学院文学研究科修士課程をご修了になり、博士（歴史学）の学位をお持ちであります。現在、國學院大學名誉教授・同大学院客員教授をお勤めになられております。ご専門は、古代・中世の神道史・神社史でございます。

最後にお話いただきますのは、藤森馨先生です。先生は、昭和三十三年東京都のお生まれで、國學院大學大学院文学研究科博士後期課程を単位取得満期退学

され、博士（宗教学）と博士（文学）の二つをお持ちでございます。現在、国士館大学教授をお勤めであります。

この三人の先生方は、今年は大変お忙しく、テレビ等の取材にご活躍されておりました。そこで、今年この三人の先生にご登壇頂くことが最もふさわしいのではないかと、神道研究所は考えた次第でございます。

おおよそのスケジュールでございますが、このあと一時間ほど所功先生の基調講演、そのあと十分ほど休憩をとりまして、岡田莊司先生、藤森馨先生のご発題、また十分ほど休憩をはさみまして、午後四時二十分ごろから相互討論となると思います。

では、さっそく最初の基調講演の所功先生にご登壇頂きたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

〔基調講演〕

皇位継承を考える―令和大礼の成果と課題―

所 功

【所功】皆さんこんにちは。この平成三十一年（二〇一九）が令和元年と改まりまして、あつという間に一年が過ぎつつあります。おそらく将来、この年度はいろいろな意味で、深い感慨をもって思い起こされることになりましょう。

私は昭和十六年（一九四一）十二月の生まれで、つい最近七十八歳になりました。いわゆる後期高齢者であります。昭和四十一年四月から五十年三月まで、この皇學館大学に勤めさせていただきました。その間に、神宮の第六十回御遷宮に初めて遇うことができました。ついで二回目は平成五年、この時は私の娘が皇學館の国文学科に在学しておりました御縁で、お白石持に奉仕できました。さらに三回目は平成二十五年も御縁がありまして奉拝させていただきました。一生で

三度も御遷宮に遇えるというのは、本当に幸せなことだと思います。

しかも、今回、間近に御譲位から御即位に関する一連の儀式・行事を拝見しまして、その重要性を再認識しております。

本日は、この一連の儀式・行事を振り返りながら、これから何をしなければならぬのかということも、それぞれの立場で考える機会として、このようなシンポジウムを開いて頂いたことは、本当にありがたいと感謝しています。

一、戦後七十年余の動向

主題を考える背景としまして、少し余分なことを申し上げます。私は、戦後の小・中・高で学んできましたが、日本に皇室があり、天皇陛下がおられることを当然だと思っていました。ところが、昭和三十五年（一九六〇）四月に大学へ入った時は、安保騒動で国中が揺れ動いていたのみならず、『中央公論』という雑誌に「風流夢譚」というものが出て、非常なショックを受けました。

これは深沢七郎という社会小説家の書いた短篇です。東京で暴力革命がおきて、皇室の方々が斬殺され、その首が転がるのを嘲り笑うという内容です。それは夢物語と称していますが、背景に皇室を著しく非難する学界や論壇がありました。

そのような時期に大学へ入った私は、ひよつとしたら日本に革命が起きるかもしれない、皇室が無くなるかもしれない、という恐れを懷きました。革命により皇室を否定するような考えには非常な違和感を覚え、六年後に大学院の修士卒業後、この皇學館大学へ勤めることになりました。ここで幸い、皇室を中核とする日本の歴史を学びながら教える機会に恵まれたのです。

そして昭和四十八年（一九七三）第六十回式年遷宮の年に出来ましたのが、この皇學館大学神道研究所であります。その経緯は、詳しく存じませんが、当時の佐藤通次学長はじめ先生方の素晴らしい御見識だと思います。

その主なテーマは、大嘗祭の研究であり、当時熱心に研究会が続けられ、その成果が昭和五十三年『大嘗祭の研究』という立派な論文集として公刊されました。私は五十年から文部省に教科書調査官として勤め、多忙を極めておりましたから、そこに執筆できませんでした。研究所発足からわずか五年で非常に大きな成果を生みだされたのです。さらに十年余り経って、平成の初めに『続大嘗祭の研究』という総合的な論文集も出版されました。

私も研究者として何をすべきか、いろいろありますが、まずしっかりとした研究を積み重ねて学界・論壇に問うていくことです。それは、神道研究所が出来、また協力いただいた方々によって、成果が出された。そのような研究実績が、このたびの大嘗祭にも直接間接の貢献をされたに違いないと思います。

もう一つ、いま日本の皇室は、「万世一系」だといわれ、初代「神武天皇」だということ、かなりの人々がその通りだと思っておられるとみられます。しかし、それを強く否定するような言論が、戦後長らくありました。

それは「紀元節」と言われておりました国家的な祝日を、戦後あらためて祝日にしてほしいという国民の声があつたにもかかわらず、占領政策に合わないということと否定されたからです。それが「建国記念の日」として「祝日法」に加えられるのは、私がこの皇學館大学に奉職した昭和四十一年であります。

そのころを振り返りますと、まだ学界も論壇も神武天皇を認めないどころか、継体天皇以前を抹殺するような言論が多勢を占めておりました。そういった中で、皇學館の先生がたは、それぞれ学問的な根拠に基づき明確な主張をしておられました。その中心が後に学長となられた田中卓博士であります。

田中先生（大正十二年生まれ）は、昨年九十五歳で亡くなりましたけれども、この先生が戦後の学界において果たされました役割はきわめて大きい。とりわけ、「建国記念の日」を二月十一日と定めるために果たされた役割は絶大であります。もし「建国記念の日」ができていなければ、「神武天皇以来」とか「万世

一系」と言うこと自体、なかなか難しい状況がもつと続いたかもしれません。

さらに、もう一つ加えますと、「昭和」の御代が長く続きました。けれども、戦後、元号（年号）は明文上の法的根拠を失いましたから、新しい元号を決めることが出来ないのではないかとという心配がありました。そこで、神社界や有識者など全国の各方面から声が上がりました。「元号法」という法律が昭和五十四年（一九七九）にできました。これもきわめて重要なことだと思います。

戦後七十年あまりの間にできた皇室関係の大切な出来事をあげるとすれば、第一は「建国記念の日」の制定、第二は「元号法」の制定であります。もし昭和五十四年に「元号法」が出来ていなければ、おそらく十年後の昭和から平成への改元は、容易に出来なかったと思われます。このようなことを考えますと、皇學館大学、あるいは全国の有識者の果たされた役割は極めて大きいと思います。

これらのことを振り返ってみますと、今回のようにスムーズな改元、あるいは盛大・厳粛な御大礼は、放っておいて自動的に出来たものではありません。それだけ先人たちの非常な御努力があり、その根底に着実な研究成果があつたからこそ、可能になったのだと思われます。

たとえば、のちほどお話を頂きます岡田莊司先生は、平成の大嘗祭に関して、当時いろいろ議論があるなかで、古来の大嘗祭の史実と意義を学問的に立証され、大嘗祭への観念的な誤解をはねのけられました。そのおかげで平成の大嘗祭が何とか出来、それを受け継いで令和の大嘗祭も順調に実施できたのです。

今回の御代替わりは、御譲位という二百年ぶりの出来事を除けば、ほとんど前例に従って臨むことができました。それは、昭和から平成にかけて多くの方々が準備されてきた成果が実つたことになると思います。

もう一つ申しあげますと、神社新報社におられました葦津珍彦先生などを中心に「皇室法研究会」ができた功績も大きいと思います。その数年にわたる成果が昭和六十二年に『共同研究 現行皇室法の批判的研究』（神社新報社）として出版

されました。これは戦後の皇室典範に規定がない大嘗祭が今後できるかどうか、ということをご心配された方々、とりわけ葦津先生や京都大学の大石義雄先生などが、どのようにすれば行うことができるのかという観点から、現行の皇室関係法を徹底的に検討して、大嘗祭を行える根拠を示されたものです。最近この本が再版されておりますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

戦後の昭和二十年代・三十年代から四十年代・五十年代を経て、昭和六十年代に御代替わりがあった。それから三十年経って今回の御代替わりを迎えた、その歩みを振り返りますと、誠に感無量なるものがあります。

歴史とか伝統というものは、このように多くの人々の真剣な努力があるからこそ受け継がれていくものだと思っております。

そこで、今日は、専門的な詳しい話は、あとで岡田先生や藤森先生から頂けることになっておりますので、私は少し概観的なお話と管見を申し上げて、皆さんの御批評を賜りたいと思います。

二、「元号法」と「令和」の改元

最初に、面白いデザインを御覧に入れます（79頁レジュメ参照）。今日のお土産です。この「令和」という二字を上下反対にすれば、あつという間に「平成」となります。これは、平成二年（一九九二）生まれの野村一晟という富山市の学校に勤めておられる美術の先生が作成されたものです。

これはアンビグラムと言いまして、アルファベットのデザイン文字をひっくり返すと別の意味になるアイデアを応用して、日本のひらがな・カタカナや漢字でもできるようにされたものです。そして、このたび四月一日に新元号が発表されると、野村さんは、わずか一時間ほどでこれを作られたものだそうです。これを私が講演レジュメや著作に使用することは事前に許可を得ております。

さて、この元号がありますが、新聞・雑誌などを見てみると、西暦を使うケースが非常に多くなっています。それは自由ですが、元号も大事だということを理解してほしいとおもいます。

これは、明治以降「一世一元」となっており、大正以降それが在位中の天皇の追号となっております。従って、元号は時の天皇の存在を日常的に意識する大事な手がかりなのです。今年が令和元年というのは、新しく陛下が御立ちになった年であり、来年になれば二年目を迎えるのですから、一世一元の元号を使うことによって、時の天皇陛下との関係を自然に意識することになります。天皇と国民の関係を繋ぐ最も大事な絆が元号にほかなりません。

わが国では、西暦六四五年、「大化」の改新に際し初めて元号が建てられました。しばらくは断続的でしたが、西暦七〇一年、「大宝」という元号ができて以来、今日まで一三〇〇年以上続いてきました。一年も欠けることなく元号が作られ使われてきたのです。

しかも、今や元号制度が続けているのは日本のみとなりました。それは、いうまでもなく、日本には古代から皇室があり、今も天皇陛下がおられるからこそ可能なことです。本家の中国では、二二〇〇年以上前の漢代に元号ができました。けれども、一九一一年、辛亥革命で清王朝が倒されると元号も無くなりました。また同様に、周辺の朝鮮王朝であれ、ベトナム王朝であれ、王朝の滅亡により元号も無くなったわけです。

日本の元号制度は、今から一三〇〇年あまり前の「大宝令」という最高の国家法に「およそ公文（くもん）に年を記すべくんば、皆年号を用ひよ」と明文化されています。それまではほとんど干支（えと）であらわしていた年次を、大宝元年以降は原則として、「年号」で記すことになったのです。

しかも、明治改元の際「一世一元」になり、天皇一代に元号一つという制度が今に続いております。それは先ほど申し上げたとおり、戦後いったん明文上の法

的根拠を失いましたが、昭和五十四年に「元号法」ができたのです。

ただし、従来は天皇がお決めになられた元号を、「元号法」では政府が政令で定めることになっております。これは、「日本国憲法」の制約により、やむをえないやり方です。

とはいえ、憲法の第七条を見ますと、天皇の国事行為として、法律・政令・条約などは、国会や内閣で決めてから、天皇の署名・押印を経て公布することになっております。政府が政令を定めても、国家・国民に代わって象徴天皇が署名され、侍従に御璽を押さしめられた上で、正式に公布されることになりました。

このような法制度のもとで、今回もスムーズに改元が行われました。ただ、少し残念なことに、皇位継承が五月一日となったにもかかわらず、新元号の発表は一ヶ月前の四月一日でした。そのため政令は、時の天皇が御署名なさるほがなく、平成の天皇陛下が御署名をなさり、まだ皇太子の新天皇陛下は、その説明をお聞きになるという措置がとられました。これは、遺憾なことであります。

もしも、コンピュータや公的な書式の切り変えに時間が必要であれば、一ヶ月前に政府が政令を閣議で決めるとしても、それを四月一日に内定案として発表した上で、後の五月一日に新天皇のもとで正式に公布手続きをとり、公式に施行するということを明示すれば良かったと思われる。それを今回の場合は、閣議で決めた即日 to 公布するようにしてしまったのです。

この点は、今後に向けて反省し、「元号は、皇位の継承があつた場合に限り改める」という法文に照らして、新天皇陛下が御署名をなさってから、公布・施行されるということに改めてほしいと存じます。

このたびの「令和」という新元号については、すでにいろいろな情報が出ておりますとおり、従来の二四六の元号は、判明する限りすべて漢籍、中国の古典に拠ってきました。それを、初めて日本の古典、『万葉集』に拠ったのは、まさに画期的なことでもあります。

もちろん『万葉集』は和歌集であり、その和歌から採ったわけではありません。大宰府長官の大伴旅人が主催した梅花をめぐる宴会で詠まれた和歌集に漢文の序文がありまして、そこから「令」と「和」を採ったということです。

当時の律令官人たちは古典を充分に学び、それを活かして、自在に漢文表現をする能力を持っておりました。その見事な序文の中から「令」と「和」が採り出されたということの意味は、きわめて大きいと思います。

この「令和」という新元号の文字案は、どなたが考え出されたのか、本来は発表されない建前です。しかし今回は、直ちにわかつてしまいました。なぜなら『万葉集』といえ、第一人者の中西進先生が八十九歳でもご健在でして、これは中西先生が考案されたのであろうと、マスコミが推測し報道もしました。ご本人は問い詰められると、「私は知りませんが、どうも中西という人が出したようですね」と間接的に認められましたから、それを裏付けとして今では間違いないとみられております。

その中西先生が、「令和」の「令」は、良いとか美しい、もっと言えば整った美しさ、麗しさであり、また「和」は、いうまでもなく平和・和合にほかならない。従って、「麗しい平和の精神を日本人が体現して、それを世界の人々に広めていくことが令和時代の日本人の務めだ」と語っておられます。

まさに「令和」の元号の意味する麗しい和の精神は、いまこそ必要な理念であります。国の内外で政治も経済も極端な対立・抗争がますます過激化しております。それを何とか和合の世界に導いていけるのは、おそらく日本人の務めだと自覚して、その理想を身近なところから実現することに努めたいと思います。

三、二百年ぶりの讓位による踐祚

ついで、新天皇の御踐祚および即位礼と大嘗祭に関して粗々触れたいのですが、

時間も限られておりますので、それは藤森先生と岡田先生から詳しく承ることにして、私は少し側面的なことを申し上げます。

日本の天皇は、明治以降、原則として終身在位が「皇室典範」に決められております。昭和天皇がそうであられたように、平成の天皇も最期までその地位にあられると思込んでおりました。皇室に強い関心を寄せてきました私も、まさか平成の天皇が譲位されるとは予測できませんでした。ただ、すでに八十歳代に入られ、いずれの日にか最期を迎えられることを心に留めながら、それに備えて若干の勉強をしてまいりました。

そういう中で、平成二十八年（二〇一六）八月八日、平成の天皇陛下が「象徴としてのお務め」について自ら説明され、それを元気に続けることが難しくなれば、次代に譲りたいというお気持ちを表明されたのです。

それを視聴して大多数の国民がご意向を理解し、共感を示しました。それを踏まえて、政府と国会が対応を考え、結果的に翌二十九年六月「天皇の退位に関する皇室典範特例法」を定めるに至りました。

いまの日本は議会制民主主義を採っておりますから、重要な事柄は法律で決めます。法律の多くは、政府から案が上程されますと、与党も野党も激論して、多数決で決めることになります。

しかし今回は、非常にありがたいことに、衆議院も参議院も、皇室問題で意見が割れてはいけないという思いがありました。そこで、衆議院のとくに大島理森議長が中心になり、与党・野党の意見をすりあわせ、一致した案を政府に出されました。すると政府は、それに沿った法案を作りましたから、国会に出されますと、両院出席議員の全員が賛成して、法案が速やかに成立したのです。

これは誠に良い例を作られたと思います。およそ日本の象徴である天皇問題に関しては、それぞれ意見の違いがあるにせよ、与党も野党もお互いに譲りあい、最終的に合意点を見つけ、今回のように出席議員の全員が賛成できるように運ん

でほしいと思います。念のため、出席議員の全員ということは、少なくとも反対か態度表明をしなくては欠席するからです。

この「特例法」というのは、「皇室典範」の本文を原則として残しながら、従来予測されなかった在り方を特例として認めたわけです。天皇陛下が御高齢になられ、百歳人生を達成される見込みは多分にあります。現に三笠宮崇仁親王殿下は、百歳で亡くなりました。従って、平成の天皇陛下も百歳を越される可能性は十分ありますが、さりとて従来のように象徴天皇のお務めを続けられるかといえば、やはり次第に難しくなるだろう。ということも自覚されていました。

だから、現行の「皇室典範」には制定されていませんが、江戸時代まであった「譲位」という方法をとれないだろうか、ということ、すでに平成二十二年（二〇一〇）ころから宮内庁の参与会議でおっしゃっておられたようです。それが漸く実現できたのです。そのような意味で、超高齢化を理由として、御譲位、いわゆる生前退位を可能にする特例の法律を作ったのであります。

そして、これは今回限りと言われておりますが、今後も高齢化社会が続くならば、今上陛下も超御高齢になられましたら、譲位されることもできる先例になるだろうと思います。新例は将来の先例になりうるはずです。

ともあれ、このたびは二百年ぶりに譲位が実現されました。江戸時代の光格天皇以来です。そのことが持つ意味は、進行する高齢化社会における在り方を考えるにも、極めて重要なヒントだと思われま

す。その御譲位は、四月末日に「退位礼正殿の儀」として簡素ながら厳粛に行われ、翌五月一日、新天皇陛下の御踐祚がありました。踐祚というのは、天皇の位を踏むことで、「登極」とも申します。

その踐祚という用語は、明治の「皇室典範」で使われましたが、戦後の典範から省かれました。そこで、平成に入る際に新しい用語を考案して、「剣璽等承継の儀」とされました。

「劔璽」というのは、三種の神器の御劔と御玉であります。また「等」というのは、天皇が国事行為でお使いになります。「天皇御璽」「大日本国璽」と刻まれた九センチ四方の御印鑑を指します。このようなものを公式に受け継がれることが「踐祚の儀」であります。昔は「劔璽の渡御」といってりましたが、それをこのような名称で「国事行為」として行われました。

これを前回も今回も国事行為として実施できたのは、まことにありがたいです。なぜなら、戦後の「皇室典範」では、いわゆる三種の神器Ⅱ「祖宗の神器」について明記できないことになりました。そこで、別に「皇室経済法」を作りまして、その第七条に「皇位とともに伝わるべき由緒ある物は、皇位とともに、皇嗣が、これを受ける」という定めを作ったのです。

天皇というのは、人格として存在しているだけではなく、いわゆる神器を皇位と一体のものとして受け継がれることに重要な意味があります。広義の「皇位」とにもあるべきものは、いろいろありまして、宮内庁では五百以上のものを由緒ある物といっております。

ただ、その中心は、いわゆる三種の神器であり、また国事行為に使われる印鑑であります。それゆえに、移動可能な御劔と御玉を儀式で受け継がれる。それを「神器」と言わないで、「皇位とともに伝わるべき由緒ある物」という言い方を用いることにより、国事行為にすることができたのです。

皮肉なことではありますが、前回も今回も現行憲法のもとでは、精一杯のやり方です。今後も劔璽等の継承は、必ず国事行為として行われ得ると思われれます。

四、上皇に学ばれた新天皇陛下

五月一日、「劔璽等承継の儀」に引き続き「即位後朝見の儀」が行われました。その時に新陛下は、「上皇陛下には……いかなる時も国民と苦楽を共にされなが

ら、その強い御心をご自身のお姿でお示しになりつつ、一つ一つのお務めに真摯に取り組んでこられました。……心からの敬意と感謝を申し上げます」と述べられました。新天皇陛下にとって、何より大事にことは、お父上である上皇陛下の三十年余りにわたる在り方、いつも国民と苦楽とともにされ、その強いお気持ちをご自身でお示しになったお姿に対して、敬意と感謝の誠を表され、それを受け継いで行く決意を示されたのです。

あまり詳しいことは申せませんが、戦後の憲法学界の論壇を振り返りますと、象徴天皇というのは、単に存在すればいいのだとか、ロボットのようなもので自ら何もすべきでないとか、できないと言われてきました。

しかし、戦後四十年余の昭和天皇は、そうではありませんでした。また、平成の天皇も、決してそうではありません。現行憲法上、「日本国の象徴」と定められる天皇は、まず憲法に規定される国事行為を当然なさいます。それと同時に、「日本国民統合の象徴」と決められている天皇は、国民全体のために何をすべきか、何ができるかを常に考えられ、積極的にやってこられたのです。

ちなみに、先般モラロジー研究所において、長らく宮内庁長官を務められました羽毛田信吾さんと対談した際は、はつきりとおっしゃれていたことが重要です。平成の天皇陛下は、積極的になすべきことを考えられ、それができるかどうかを政府と相談されて、多くのことを粘り強く実現してこられました。それは現行憲法のもとで可能なことをなさる「積極的な象徴天皇」といわれたのです。

たとえば、国内の御出ましなどは、地方自治体などの希望により、それを受けて立たれるケースが多いのですが、それだけでなく海外の慰霊などは、外国からの招請がなければ、お出かけになれません。

しかし、先の大東亜戦争で二百万を超す人が亡くなっているのだから、海外にも慰霊をしたいということを随分前から希望しておられました。でも、それは一方的にできません。そこで、政府の外務省が相手国と交渉して、相手国から元首

クラスの方に来て頂き、それに対する答礼という形で御出まし頂くことになったのです。結果として、いくつかの慰霊地へお出ましを頂きました。

そのように積極的な象徴天皇の在り方を、私どもは新聞やテレビ等で拝見してきましたが、それを一番身近で見てこられた新天皇陛下は、上皇陛下が強い御心を自身でお示しになったと受け止められ、その真摯なお姿を受け継いでいこうとしておられるのです。

また、「おことば」の続きを拝見しますと、「ここに、皇位を継承するに当たり、上皇陛下のこれまでの歩みに深く思いを致し、また、歴代の天皇のなさりようを心にとどめ、自己の研鑽に励むとともに、常に国民を思い、国民に寄り添いながら、憲法にのっとり、日本国及び日本国民統合の象徴としての責務を果たすことを誓い、国民の幸せと国の一層の発展、そして世界の平和を切に希望します」とあります。

ここで「歴代の天皇のなさりようを心にとどめ」といわれるのは、簡単な文言ですが、実に深い意味があります。

今上陛下は、歴史研究の専門家です。小さい頃から、歴史に強い関心を持たれてきました。小学校の五・六年生ころ、今の上皇后陛下と一緒に『おくのほそ道』の原文を一年以上かけて読まれたそうです。その頃から「道」にたいする関心を深められ、やがて交通史を研究したいというお気持ちを持たれました。

そこで、学習院大学において文学部史学科を選ばれ、また大学院でも主に日本中世の歴史を学問的に研究してこられた。まさにプロの歴史家でございます。その間に原史料や先行研究を丹念に調べるだけでなく、関係のある現地を訪ねられ、そこで専門家などからお話を聞かれまして、自らの見識を深めてこられました。

それと共に、昭和五十年代の初めごろ、当時の皇太子殿下は浩宮さまが中学から高校に行かれる頃ですが、学習院でも歴代天皇のことを深く学ぶことは難しいようだから、それはこちらでやるしかないと考えられ、東宮御所へ東大と学習院大学の教授を招かれまして、歴代天皇の事を実証的に学ぶ機会を持たれました。

そのようなことを通じて、歴代天皇のなさりようを詳しく学んでこられたのです。それをふまえて「心にとどめ」とおっしゃっておられるわけです。

さらに、皇太子時代からの御発言も見て参りますと、「自己の研鑽に励む」とか、「己の研鑽に努める」という文言がよく出てきます。それは非常に重要なことであります。おそらく歴代天皇がそうであられましたように、昭和天皇も平成の天皇もずっと生涯学び続けてこられました。それを承け継いで研鑽を積み続けようとしておられるわけです。

ちなみに、私は数年前から、昭和天皇の御製を『昭和天皇実録』からピックアップして雑誌に連載し、それを本にしようと準備しておりました。その最中に、たまたま朝日新聞社の宮内記者から、昭和天皇の御歌原稿らしきものが出てきましたと、一回見てくれと頼まれました。早速拝見しますと、これが何と昭和六十年（一九八五）・六十一年・六十二年・六十三年、晩年八十代半ばの四年間にわたる未発表とみられる御歌が二百五十首ほど確認できました。それは、お手もとのメモ帳や便箋のようなものに鉛筆で書かれています。

そこには最晩年に御所や御用邸で会われた方やお出かけになられた所のことなどが、歌日記ように詠まれています。それがそのまま残っていましたのを、長らく陛下に信賴され身のお世話をしておられた内舎人（うどねり）さんが、拝領され持つておられました。それを丹念に読み解き、この春『昭和天皇の大御歌——一首に込められた深き想い——』（角川書店、平成三十一年四月）という編著に付け加えさせて頂きました。

これを拝見しますと、八十代半になられましても、日々研鑽を積んでおられる、自己反省も重ねておられる、ということがよくわかります。そのような意味で、今上陛下も「自己の研鑽に励む」といつておられます。従来もそうであつたし、現在もそうであるし、今後ともそれを続けようとしておられる御意向を鮮明にされたものだと思います。

五、即位礼正殿の儀の「高御座」

こうして踐祚された今上陛下は、十月二十二日に即位礼、また十一月十四日夜半に大嘗祭を行われました。この大礼については、多くを申すまでもありませんが、たまたま私は、三十年余り京都で勤め、また「平成」と「令和」の改元および即位礼と大嘗祭についてNHKや新聞などで、報道の手伝いをする機会に恵まれましたから、その際に知りえたこと学びえたことも含めて、少し大事なことの一端を申し添えたいと思います。

その一つは、「即位礼正殿の儀」において、皆さんも目にされた「高御座」という玉座です。これは、ご承知かと思いますが、首都を東京に遷された明治以降も、今なお京都にあります。

京都御所というのは、正式に「京都皇宮」と申します。「皇宮」とは天皇のおられるお住まいをいいますから、東京が主要な皇宮です。しかし、それは東京の皇居だけでなく、京都にも皇宮があるのです。

それをはっきりさせられたのは、大正四年（一九一五）の御大礼の時です。しかも、そのもとを辿れば、明治十年（一八七七）に明治天皇が京都へお出ましになり、明治二年（一八六九）の東京行幸以降、すっかり寂れている京都を非常に心配され、「将来の即位礼・大嘗祭を京都で実施出来ないか」と仰せられました。

そこで、政府の関係者が検討して、同二十二年制定の「皇室典範」に「即位ノ礼及大嘗祭ハ、京都ニ於テ之ヲ行フ」という明文を設けました。そのおかげで、大正天皇の即位礼・大嘗祭、および昭和天皇の即位礼・大嘗祭は、京都で行われたのです。

その両即位礼で用いられた「高御座」は、一三〇〇年余り前の文武天皇朝までに出来あがったとみられています。より具体的には、平安前期末（十世紀前半）にできた『延喜式』などに詳しく定められており、いろいろな記録もあります。

それが中世・近世には、財政的な事情もあって、かなり貧弱になっておりました。しかも幕末には、安政の大火で内裏が焼けてしまいました。そのため、明治元年（一八六八）の即位式には、高御座の代わりに御帳台を用いられましたが、これを何とか復元しようとして造られたのが、大正初めの高御座です。

平成の初めころ、私は御大礼に先立って、大正初めに高御座を造られた方のお孫さんに会い、お祖父さんたちがどんな思いで造られ、如何に苦労されたのかを承りました。それらを通じて、当時の職人さんたちが、どれほどの高い技をもって、どれだけ精魂を込めて造られたのかを理解することが出来ました。そのようなものが今なお京都にあります。

平安以来の京都は、奈良や飛鳥と同じく古都のように思われがちですが、単なる古都ではありません。大正・昭和の御大礼が行われたことにより、京都御所を京都皇宮と言い、今も皇宮警察が守っているわけです。「ミヤコ」というのは、ミヤ（御屋＝天皇の宮殿）があるコ（処）を意味しますから、天皇が常住しておられなくても「京都皇宮」（御所）がある限り、京都はミヤコと称しうるのです。

その京都にある高御座が東京へ運ばれて、平成二年（一九九〇）の御大礼に用いられました。また今回も、早々と昨年東京に運ばれて全面的な修理を加えられました。百年余り前に作られたものですから、相当傷んでおりましたが、用材そのものはほとんど元のまま使い、塗りや金具をみがきあげるような大修理を加えられて、新しく甦ったわけです。

この高御座は、即位礼に天皇陛下のみが登られます。ただ、大正からは、皇后陛下も側に立たれることが、明治四十二年（一九〇九）の『登極令』に定められました。高御座とほぼ同様の「御帳台」と称するものが、高御座の東隣に並べられることになったのです。

近代に入りまして、天皇は従来どおりオンリーワンの存在ですが、皇后さまも一緒に並び立たれる形で、洋風を取り入れられたのです。ただし、大正の御大礼

は、大正三年（一九一四）に予定されておりましたが、昭憲皇太后がお亡くなりになられたので、翌四年秋に延期されました。その間に貞明皇后が懷妊されて、のちの三笠宮さまを十二月の初めに出産されるため、その直前の大礼には出られませんでした。従って、両陛下お揃いで、即位礼に御出になられたのは、昭和の御大礼で初めて行われました。それを受け継いで、平成と令和の即位礼においても、両陛下お揃いでお出ましになられたわけです。

これらを含めて考えますと、即位礼も基本的には古来の伝統を大事にされながら行われてきましたが、いろいろ新しい変化も加えられています。とくに即位礼の装束は明治から一変しております。一三〇〇年ほど前からは、古代中国の皇帝が身に着けるような礼服でありました。

しかし、明治の初めからは、和風の束帯で最高の黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）をつけられるようになりました。皇后陛下も、いわゆる十二単を召されて参列されるようになったのです。唐風を改めて和風にして洋風もとりいれる、という形で近代化を上げております。古来の伝統を受け継ぎながらも、新しく改革を加えるということが、即位礼の在り方にも見られるのです。

この「即位礼正殿の儀」は、正午すぎ雨模様の中で始まりました。そして、高御座に天皇陛下が登られ、また隣の御帳台に皇后陛下が立たれた午後一時ごろ、不思議なことに雨がやみ、しかもレインボーブリッジあたりに美しい虹が出たのです。私はスタジオの内にいましたので映像を見ただけですが、本当にびっくりしました。これは天からの祝福と感じられたことでしょう。

けれども、その夕方に予定されていた「祝賀御列の儀」は、延期になりました。いつになったかといえば、十一月十日です。この十一月十日は、大正・昭和の即位礼が京都で行われた日にほかなりません。

どうして大正・昭和の即位礼をこの日にしたかといえば、慶応三年（一八六七）九月、徳川將軍慶喜が大政奉還を申し出て勅許された日を、新暦に換算しますと

十一月十日なのです。それを意識して、大正の即位礼も昭和の即位礼もこの日に行われました。のみならず、平成の天皇が立太子礼をあげられたのも、昭和二十七年（一九五二）の十一月十日でした。そのような由緒ある日を選ばれて、祝賀御列の儀をなさったのだらうと思われます。

六、大嘗祭用の神饌と庭積机代物のお供え

さらに大嘗祭のことは、岡田先生からお話が頂けると思います。ただ、一つだけ申しますと、大嘗祭で最も大切なものは、お供えものです。それはいろいろありますが、一番大事なのはお米と粟を神饌としてお供えになることです。お米だけでなく粟も神饌としてお供えになります。

しかも、加えて全都道府県から「庭積机代物」（にわづみのつくえしろもの）というものが出されます。これは、悠紀殿・主基殿と言われる大嘗宮の中でお供えになる御神饌と別物でして、大嘗宮の前庭に並べられる全国の特産品です。

今回三重県からは、茶・みかん・のしあわび・乾燥ひじき・鱧節が出ています。これは平成二年（一九九〇）の時とほぼ同じですが、たとえば山形県を見ますと、ラ・フランスとかシャインマスカットなど、おしゃれな物も新しく出ています。つまり、今日の日本全国でこのように素晴らしいものができることを、大嘗祭の神々（天照大神と天神地祇）や新天皇陛下の御覧に供するために積み並べられるのだと思われます。

これが始まったのは、明治四年（一八七一）の大嘗祭からです。東京の皇居で初めて行われた明治大嘗祭には、悠紀（ゆき）国として現在の甲府市、また主基（すき）国として現在の鴨川市が選ばれました。その両地方から願ひ出て、この机代物が始まりました。それが大変いいことだと認められ、大正以降は全国から出してもらうことになり、今回に及んでいます。

ただ少し残念なことに、毎年の新嘗祭にも大嘗祭にも、全都道府県からお米と粟を出してもらったことになっているにも拘わらず、粟を出せるところが減って、今ではわずか二十五府県しかありません。

ついでに申せば、大嘗宮の建物は、長らく萱葺で作ってこれましたが、今回は板葺にされました。それを作る職人が少いと、費用がかかるからというのが理由だそうです。そうすると、今後、粟も作れる人が少ないから、いづれ止めてしまうということになりかねません。これは遺憾なことだと思います。

およそ日本人は、縄文時代から粟や稗（ひえ）・黍（きび）・豆など、畑でできるものを食べておりました。やがて弥生時代になりますと、水田で作るお米は、収穫量も多いし栄養価も高いということで、主食が変わってきました。それでも、お米だけでなく、粟を作ることも忘れてはいけないということで、毎年の新嘗祭にお米と粟をお供えます。

また大嘗祭でも、特別に悠紀の地方と主基の地方から神饌用のお米と粟を出してもらおうと共に、全都道府県から庭積机代物としてお米も粟も出してもらったことが続いているのです。これは大変意味のあることです。平常時には水田でお米がとれても、非常時には陸田でとれる粟などを備えておく知恵として、これから大切にすることがあると思います。

このようにみてまいりますと、伝統を守っていくことは必ずしも容易なことではありません。大事なことを守っていくためには、そこに見識のある人々がいて、その思いをみんなで受継ぐ努力をしなければ、長らく伝えていけません。今回そのようなことも痛切に実感しました。

まだいろいろ申し上げたいこともありますが、すでに時間一杯となりましたので、これにて失礼いたします。どうもご清聴ありがとうございました。

【佐野】所先生、ありがとうございます。ここで十分ほど休憩とさせていただきます。

〔発題一〕

大嘗祭研究について―平成と令和の大嘗祭を終えて―

岡田 莊司

【佐野】休憩前に引き続きまして、再開したいと存じます。それでは、発題一といたしまして、國學院大學名誉教授、岡田莊司先生よりお話を伺います。どうぞよろしくお願いいたします。

【岡田莊司】只今、所功先生から令和の即位の礼について、詳細なお話がありました。本日は、平成の大嘗祭と令和の大嘗祭について、二度にわたり御代替わりの大嘗祭に際会することができましたので、これを回顧してお話したいと思えます。

実は、昨年の平成三十年（二〇一八）六月二十八日に皇學館大学研究開発センター神道研究所で大嘗祭の話をさせていただいております。その時には、「大嘗祭―天皇祭祀権と在地性―」というテーマでした。これは、特に藤原忠通の大嘗祭記録と、いまでは有名になりました後鳥羽上皇が順徳天皇のために書かれた記録、御告文が残っておりまして、それらを紹介しながら話をさせていただきます。既に校正は終わっており、来年（令和二年・二〇二〇）三月発行予定の『皇學館大学研究開発推進センター紀要』第六号に掲載されます。

また、これ以前の平成二十六年七月には、加茂正典・斎藤英喜・藤森馨先生とご一緒に、「古代の祭祀と伊勢神宮」を総合テーマに、「古代祭祀論の基調」（『皇學館大学研究開発推進センター紀要』第二号掲載）と題して話をしておりますので、重なるところがあることはお許しください。

平成と令和の大嘗祭に際して、この三十年間にいろいろな研究書・著書がでています。皇學館大学では、昭和のときに、所先生が紹介されました『大嘗祭の研究』（皇學館大学出版部、昭和五十三年四月）、さらには、『続大嘗祭の研究』（同大

学出版部、平成元年六月）が出されました。平成前の大嘗祭研究に役立ちました。そして、平成から令和の三十年の中で、私が勉強になったのは、この神道研究所で作られた『訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭』（思文閣出版、平成二十四年六月）であります。これは、皇學館大学神道研究所がご苦労され、総力をあけて編纂されたものです。もう一つ、虎尾俊哉先生が編者となって作られました『訳注日本史料 延喜式』の上中下三巻（集英社、上・平成十二年五月、中・平成十九年六月、下・平成二十九年十二月）が出されております。『延喜式』五十巻の詳しい注釈が施されており、大嘗祭や新嘗祭、伊勢の齋宮と神宮祭祀などを研究する上でたいへん便利になっております。この踐祚大嘗祭式は岡田が、伊勢大神宮式は藤森先生が補注を担当させていただいております。もう一つ、感謝しているのは、所先生のお仕事です。所先生が昨年刊行されました『近代大札関係の基本史料集成』（国書刊行会、平成三十年八月）です。私が近現代を専門としていませんので、これを見ますと明治四年（一八七二）の大嘗祭、あるいは大正の大嘗祭など、近現代の大嘗祭や即位の礼に関する詳細な史料・研究がよく理解でき、収録され尽くされています。これで所先生が先月（十一月二十三日）「日本学賞」を受けられました。これらによって、平成のときに比べて大嘗祭研究は格段にしやすくなりました。有り難いことです。

令和の大嘗祭を迎えて

令和の即位を記念して東京と奈良において『正倉院展』が開催されました。奈良国立博物館の方は、七十一回目ですので、戦後すぐに始まっています。先月、奈良国立博物館の展示を拝見してきましたが、入口の最初に出てきた品は「赤漆文櫨木御厨子（あかうるしのぶんかんぼくのおんずし）」と言います。これは『国家珍宝帳』、別名『東大寺献物帳』の二番目に載っている両開きの棚です。この中

に非常に貴重な品々が入って伝えられました。その『国家珍宝帳』の解説の中で、天武天皇、さらに持統天皇、文武天皇、一代おいて元正天皇、聖武天皇、孝謙天皇に伝えられたということが書いてあります。皇室にとってのお宝物として所蔵されてきました赤漆の棚が大嘗祭が始まった天武天皇、持統天皇の時代からの伝世品として現在に残されてきたことは驚嘆に値します。来年は、『日本書紀』が成立して一三〇〇年を迎えますが、まさに『日本書紀』が成立する以前、壬申の乱の後、天武天皇が即位され、天皇の新嘗である、のちの大嘗祭に匹敵した祭祀が始まった御世の、その時にお持ちになっていた厨子が現在まで伝世しているのです。その後は、東大寺に残され、近代以降は皇室の御物として勅封されて守られてきました。海外では、ほとんどの遺物は発掘品が多いなかで、我が国では、皇室の伝統のなかに伝世品が伝えられ、祭りとして大嘗祭が厳肅に斎行されることは、大嘗祭研究に携わる者として非常にありがたく、令和の大嘗祭を前に拝見できたことは感慨深いものでありました。

先月の令和の大嘗祭が終わりますと、皇居内に設けられました大嘗宮の一般公開が行われました。皆さんのなかにも行かれた方は多いと思います。新聞報道によりますと、平成のときに比べて、今回の令和の方が倍以上の人が参観したとありました。平成と令和とは、皇居内の場所は同じでしたが、とくに感じたのは、大手町の方向は三十年前と違って高層ビルが多いように感じました。また前回と違うことは、屋根の葺き方が、萱葺ではなく板葺になっているところです。

大嘗宮を見学して印象に残ったのは、大嘗宮を囲む柴垣に椎の枝葉が挿されていることです。これは『貞観儀式』と『延喜式』の踐祚大嘗祭にも記録されていることです。これを和語で「志比乃和恵」と呼んでいます。また膳屋にも椎の枝が挿されています。なぜ椎の枝葉をこのように挿しているのでしょうか。椎の実が縄文時代、稲作以前の秋の収穫物でした。私は、鎌倉の鶴岡八幡宮が小学校の通学路だったので、毎年秋になると、大きい椎の木があって、それがたくさん実

を落としていました。昭和三十年代前半、伊勢湾台風のころですけども、友達と生で食べていました。結構お腹にたまります。古くからの食料の供給源として、椎の実や栗の実が重宝したと思われます。先ほど、皇學館に来る途中、神宮徴古館で開催されている「大嘗祭」展を拝見しました。そして倭姫宮の前の道を通ってききましたが、椎の実がたくさん落ちていましたので、このとおり少し実を拾いました。伊勢は椎の木と実が多いようです。

『延喜式』大膳職式を見ますと、新嘗祭のときの豊明節会には、椎の実が四合御料として出されます。中男作物と言って、奈良時代・平安時代の租税の制度があるのですけども、青年男子が差し出す品にもなっています。伊勢国からは大膳に「椎子二担」を出すことになっており、伊勢の地は椎の実と関係が深かったようです。天皇の新嘗祭と同じ日に、伊勢斎宮の新嘗が行われていますが、ここにも『延喜式』斎宮式によりますと、「椎子」とある椎の実が用意されています。椎の実実は斎宮寮で準備されますので、この伊勢の地で採集されたものと思われる。さきほど鳥羽市の橋本宮司様から椎に関する資料を頂きましたが、お話しによると、鳥羽市の神社では、椎の葉を使って玉串にしているとのことでした。椎の葉と実が、伊勢の地では神様とつながる神事に使われており、食料供給が重要であったことを伺うことができます。

神膳供進と伊勢祭祀との関係性

九十年前、昭和の大嘗祭にあたり、私が勤務していた大学（國學院大學）の大先輩にあたります折口信夫先生は大嘗宮の悠紀殿・主基殿に用意される中央の神座（寢座）は天皇が資格完成のために物忌をする場所であり、神話に見える真床覆衾をかぶり、これを取り除いた時、完全な天子様（天皇）になられると論じられました。これが昭和の寢座秘儀説、マトコオフスマ論のはじまりでした。昭和

の戦後、この学説は当時流行していたオカルトブームも手伝って、無批判に学問世界に拡散していきました。しかし、平安時代・中世の記録には、どこにもそうした秘儀説は書かれておらず、もっぱら神饌の御供進が重要であると記録されています。つぎの室町時代に記された記録に、そのことが記されています。

・後円融天皇大嘗祭（永和元・一三七五）二条良基の『永和度大嘗会記』

神膳の次第は人のしらぬみぬ事なれはしるし申をよはす、天神地祇を天子のてつからまつらせ給て、神供をそなへ給ふとそうけ給はる、執柄の家などの外はしる人もなきにや、夕膳は亥時にて侍へけれども、やう、夜あけかたになりぬ、近代はかやうにそ侍る、神膳はてて又廻立殿にかへらせ給ふ、又御ゆかけあり、そのち主基の神殿へなりて、又御膳をそなへ給ふ、さきのことし、抑天子の代のはしめに大神宮以下にたてまつらせ給ふ神膳なれは、いかほと結構せられて金銀の器などにてこそまいるへけれども、た、器かしはの葉はかりをあみつらねて御膳の器にそなへたり、神代の風俗儉約をさきとせられる事のいみしさ、

・称光天皇大嘗祭（応永三・一四一五）関白一条経嗣『応永大嘗会記』

何よりも神膳の儀ことゆへなくとけおこなはれぬる、神威のいたりもいちしるしくめてたし、凡神国の大事ハ大嘗会也、大嘗会の大事ハ神膳に過たることハなし、其故は神座・神服をまうけて、まさしくあまてる大神を勧請し申されて、天子御身つからまつり給ふ儀也、代々執柄申さたに付ても故実口伝ともおほくあるにや、

後円融天皇大嘗祭について書かれた二条良基の『永和度大嘗会記』や称光天皇大嘗祭についての関白一条経嗣『応永大嘗会記』などを見ますと、一番大事なことが神饌の御供進であると書かれております。三十年前、平成の大嘗祭に際して、拙論では天皇の御所作は神膳が中心であり、寢座は大神が来臨し泊まれる神の座であり、天皇といえども入ることのできない「見立ての座」であると論じました。

大嘗祭と同じ形式の新嘗が始まったのは、天武天皇の時とされています。一代一度になるのは、持統天皇の時です。その理由として、六七二年に壬申の乱が起きます。伊勢国に大海人皇子が入られて、天照大御神を遙拝する。そして壬申の乱に勝利します。翌年、天武天皇二年（六七三）の時に飛鳥浄御原宮で即位されました。豪族との対立、国家を二分する争乱を收拾するために、新しい祭祀が生み出されました。もう一つ大事なことは、大来皇女という天武天皇の皇女を、後の初斎院にあたる、泊瀬の斎宮に赴かせます。その年の秋十一月に播磨・丹波を卜定しました。この稲米を用いて新嘗が行われるとともに大来皇女も新嘗を奉仕したと推定されます。さらに翌年、大来皇女が伊勢の斎宮に入られました。斎宮は、いまちょうど、松阪寄りのところで発掘調査が行われています。数年前から七世紀後半の初期斎宮にあたる部分が掘られており、今後正殿の部分が出てくれば、斎王の祭祀との関係性も考察することが可能になると思われます。大嘗祭が始まった時期に合わせて、のちのちの『延喜式』の記載をも照らして考えると、大来皇女の新嘗も行われていたのだらうと考えています。今後の斎宮発掘調査が期待されます。

新しくはじまった郡（当時は評）の卜定があり、播磨と丹波の国内に決められています。必ずしも当初は東西ということではなかったようです。おそらく毎年、新嘗の儀礼が行われて、当時は地方の、郡が選ばれて郡司子弟が奉仕しました。そして天武天皇五年（六七六）九月条によると、尾張と丹波に悠紀と主基が決められました。「悠紀（ユキ）」というのは、神聖なという意味でしょう。第一の供献の儀をするところ、「主基（スキ）」は第二番目の供献の儀をするところです。日をまたいで二度の神膳供進があることは、伊勢神宮祭祀と共通しているのであり、ここ伊勢の皆様にとっては常識といえるでしょう。折口のマトコオフスマ説では、二度同じ儀式が繰り返されるのか、説明がつきません。そこで大嘗祭と伊勢神宮祭祀の進行の時間帯について見ていきたいと思います。

『儀式』巻一神今食儀を見ますと、「亥一刻、御膳を薦め、亥四刻、御膳を徹す」、「寅一刻、曉膳を供える、寅四刻、御膳を徹す」とあります。時間帯は、午後九時から十一時、曉の御膳が翌日午前三時から午前五時となっています。神今食とは、六月と十二月に新嘗祭に準じたような儀式が行われます。その時間は、基本的に、当時の大嘗祭も新嘗祭も変わらないです。次の『儀式』巻三踐祚大嘗祭儀・中に、「亥一刻、御膳を供え、亥四刻徹す」「寅一刻、主基御膳を供える」ということになっています。ただ近代以降につきましては、悠紀殿の儀式が三時間ほど早められており、陛下は、午後六時半ごろに殿に入られて、実際に終わるのは、午後九時半くらいです。平成時代の天皇陛下の入御、出御時間帯は、今回も変わりませんが、早まっております。

一方、伊勢神宮については、みなさまご承知のとおり、朝御饌・夕御饌が行われております。『皇太神宮儀式帳』九月例の神嘗祭「亥刻より始め、丑時に至るまでに、朝御饌・夕御饌、二度供奉畢」、『止由気宮儀式帳』六月例の月次祭「亥時より始め、丑時に至るまで、朝の大御饌・夕の大御饌、二度間置きて供奉。これを由貴と号す」などとあります。宮中祭祀の御神饌供献、あるいは伊勢神宮の神嘗祭なり、六月・十二月の月次祭、三節祭、また遷宮の儀式なり、行われる時間帯が同じでありました。ということは、やはり儀式の本質に関わる部分であると考えられます。

天武天皇二年に始まるこの儀式に、いろいろ学説はありますが、中世の記録では、たしかに伊勢五十鈴川上坐天照大御神及び天神地祇ということになっております。本来的には、嘗祭りの対象は、天照大御神が元々でありました。これが、天武天皇・持統天皇の御世から始まっているのではないかと考えます。持統天皇の御世になりますと、大嘗祭と式年遷宮が行われるということで、持統天皇三年（六八九）に飛鳥浄御原令が成立し、同四年元旦に即位の儀式が行われる。同四年九月に、これは『太神宮諸雜事記』などの記録によりますと、式年遷宮が行わ

れる。同五年には、大嘗祭が斎行されます。ということ、天武天皇と持統天皇の時代に古代祭祀・祭式の基本的体系が確立していくことは確かといえるでしょう。大嘗祭と天皇新嘗は伊勢祭祀と一体であることに意味があります。

天皇は御座に座られ、京都の場合、東南の方向に向けてスゴモの上に神膳を重ねていました。これは伊勢神宮の方向を強く意識して供膳が行われています。おそらく伊勢神宮における外宮の御饌殿祭祀の形式を天皇宮殿内に取り込んだものであり、御饌殿祭祀が一番近場で内宮の神に対して、朝・夕の御饌を供える意味があったことと、天皇祭祀では、遠く拝み祭る形で行われたのだらうと、遠近の二重性が重要だったと思われます。したがって神殿の中央の神座、寢座は神を迎えるための象徴的な見立ての座でした。天皇がもつとも恐ろしかったことは天照大神の崇りです。これを防ぐ意味でも、見立ての座と供膳・遙拝の座を必要としたのでしょう。崇神天皇のときから、同床同殿は出来なくなりましたが、天武天皇のときから、天皇祭祀において同床共殿の理念が復興したといえるでしょう。

大嘗祭においても一つ大事なことは、天皇の御所作とともに、采女という女性の方が神饌供献のお手伝いをすることです。これについては、『國學院雜誌』の特集号（二二〇巻十一号、令和元年十一月）に「大嘗祭―陪膳采女の作法と祝詞を中心に―」と題して、最近紹介しました。女性が神殿に入ることは聖婚儀礼ではなく、あくまでも天照大神に丁重に食膳をお供えする作法であり、天皇日常のお食事には女官が供膳されることの延長線にあるということです。その食膳に毎日内膳が担当することも同じです。天つ神から受けられた食料供給について、天皇と天下の公民（オホミタカラ）とが生業をとおして一体となつて生育していくことの報賽を、祭祀として象徴化したものといえるでしょう。あくまでも、日常の天皇と公民の食膳確保が重要であり、このことを毎年、また代替わりごとに天照大神に報賽したことに他なりません。

最近新しく穴戸忠男氏が『神道宗教』の大嘗祭特集号（二五四・二五五合併号、

令和元年）で紹介された史料で、東山御文庫の中に靈元上皇が書かれた『大嘗会神饌次第』があります。これは、中世最後の大嘗祭を斎行されました後土御門天皇の式次第を写したものです。これには「神殿の西北をとをらせ給ふとき、御裾のつくゑなどにかゝらぬ様に、よく御進退あるべし、御座揖の、ち、御裾を引きよせらる、儀あるべからず」とあります。ですから、後土御門天皇は、西から入られ、北を通ります。その北には、繪服・龜服の入った案があり、それに引つかからぬようにとあります。将来の天皇になる方への残された言葉として、これ、気をつけなさいともあります。さらに、「これ神前におそれましますゆへなり、およそ神殿の事ハ、また〈全〉しく神ます〈座〉がごとくの礼、げんどう〈嚴重〉なるべき事なり、いかにも御心を正しくせらるべし」とあり、中での祭祀に関する機微と言いますか、中で注意すべきことは、天皇が歩かれた後、裾が案に触れて倒れてしまつたりすると、神殿内に不具合が生じてしまうので、気をつけなさいとあります。そこまで書かれているのです。そして、同書の最後には、「神膳の次第においてハ、尤肝心といふべき歟、能々秘蔵あるべき者也」ということで、神膳の供進が大事であると書かれています。また、近世の再興に尽力された靈元上皇は、「神膳ノ間ノ事、能々暗誦有ル可シ、主上御作法ノ大事、只此ノ事ニ有リ」と記して、ともに神膳供進を大事とする見解が示されています。これをちゃんと暗誦しておくようにと、靈元上皇は最後に書いておられます。

ふたたび折口論へ

最後に、折口大嘗祭論について触れておきたいと思います。わたしは令和の大嘗祭を終えて、三十年前を回顧したとき、もう一度折口論に戻ってきてしまう気がしています。大正の学問形成期に、マレビット論が確立していた折口は、昭和初期の時代性とはいえ、受靈論に拍車をかけていったのは何故だろう。神威を頂く

という意味で、受霊論は理解できるが、神そのものになる即神論としての受霊論は認め難いことですが、なぜそこに至ったのか。一世紀近い前に、マレビト論を据える折口には、中世公家社会の記録にはじまり、昭和三年の新聞まで、神膳供進の作法のことは熟知していたと思われるが、これを一蹴していったのは何故だろう。まだ回答は闇のなかにあるのです。ただし、昭和から平成へ、そして令和へと、大嘗祭論議の結果、近代日本の学問の方向性が大きく修正されていったことだけは確かなことであろうと思われます。

平成の大嘗祭に際して、私は、折口信夫先生を批判したということで、非常に重い重い荷物を背負っているような感じがしておりました。國學院の大先輩を否定してしまったので。折口信夫に対しては、いま新たな折口信夫ブームが始まっており、斎藤英喜先生の『折口信夫』をはじめ、多くの著書が刊行されています。もう一度、折口先生の論の中から、紹介しておきたいのは、「古代人の信仰」（『惟神道』昭和十七年二月／五月号、『折口信夫全集』第二十卷、中央公論社）で、これは昭和十六年（一九四二）に皇典講究所の北京支部における講演録が、翌年発表されています。

そこで言われていることは、「日本の神道というふものは宮廷―皇室から出てゐるものであり、皇室の神道が日本の国の神道の基である。此事は説明する迄も無い事柄である様にも考へられるが、之に関する知識理論を明確にして、お互ひの信念を一層深めたいと考へる次第である。」と、冒頭でそのように語っております。私も古代律令国家が始まる七世紀後半の天武・持統朝の前後から、皇室の神道と祭祀とが連動して神社祭祀・祭儀が組み立てられ、祈年祭を始めとした祭祀の体系が作られると考えており、そういう意味では、折口先生の戦前におっしゃっている通り、皇室の神道こそが、一番の基盤で基本であるということは、私も、その通りだと思っております。

我々は霊魂は一つと考へるが、古代人の信仰からすると、霊魂は無限に人に

這入ると思つてゐた様である。抽象的であるから這入らないことはないが、殊に天皇の御體には、如何程多くの霊が這入つてゐるか考へられないほど這入つてゐると信じてゐた様である。場合によつては少く、場合によつては沢山ある様に考へられるのである。此は日本の神道の一つの根本的な考へであつて、ともかく天皇の御使ひになる御魂が體に御這入りになると、新しい天皇スライマイトがこの世にはお現れになるのである。先の世の天皇は高天原に昇り、新しい天皇が新に降りてお出でになる。信仰上では御代々々に新しく、この土地に御出でになるといふ風に考へられるのである。それをまた霊魂の上からばかり考へると、大御身オホミマの内に御魂ミタマが御這入りになるといふ型になるのである。

そして、その後に、御魂の問題について詳しく論じられています。昭和三年の大嘗祭以降になると、御魂の問題が一番中心に据えられてきます。この部分は戦時下の時代性もあつたと思います。多彩な霊魂の交流・交換、御魂が天皇の御體に入つていく、そして、御魂の往還が日本の神道の根本的な考へであるということもお書きになっております。その御魂というのは、国々の御魂であつたり、家々の魂であつたり、大嘗祭のときの国風であつたり、あるいは京都の賀茂祭などに奉納される東遊の儀礼でも霊魂の受霊を信じることを大事にされています。天皇と地域・人々とがつながる一体論、外来魂と内在魂との霊の交換を確信されていきました。わたしは折口の論じた「みこともち」としての天皇の立場はよく理解でき、中央の神座（寢座）において、何がおこなわれて、という秘儀はなくて、神饌供進がもつとも大事だと考えていますが、折口先生のおっしゃっている御魂の交流というのは、当然あるべきであつて、神社において、祭に参加する、神輿を担ぐ、あるいは神宮にお参りに行く、大きな杉に抱きつくのもそうですけど、現代人においても神威を頂くということはあるわけです。なので、そのこと自体を私は、否定するわけではありません。我々日本人の信仰の一番の骨格に当たると

ころですが、無制限に御魂の交換があるとは思えません。天皇即神論もよく言われますが、限定的でありました。このことは、さらに考えていく必要があると思われるます。

平成と令和の大嘗祭について比較すると、平成の大嘗祭論議は大きな学問的論争でした。この論争によって、近代の学問の方向性が修正されていたことは確かなことだと思います。その学問をさらに深めていきたいと思っています。

【佐野】岡田先生、ありがとうございます。続きまして、発題二としまして国士館大学教授の藤森馨先生、宜しくお願い致します。

〔発題二〕

平安時代の神璽観

藤森 馨

【藤森馨】みなさんどうぞよろしく願います。御即位の前と言いますか、上皇さまが御退位を明言されたときの思い出からお話をさせていただきます。

あれは、平成二十八年（二〇一六）七月十三日でした。こちらにお出での所先生と村上天皇の日記である『村上天皇御記』を読む研究会をしていました。そうしておりますと、午後七時前から、突然、所先生の携帯に電話が入って入って、しょうがないことになりました。どうもこれは、陛下が御譲位になるようだと、えっそんなばかな、というのが正直な感想であります。それで急遽、研究会は中止ということになりました。そのような思い出で、今回の令和の御世を迎えることになったわけでございます。

私は、重箱の隅太郎、とよくいわれますが、若い頃からのあだ名でございます。また重箱の隅をつつくようなお話をいたします。

一、令制即位礼

践祚と即位というのは、元々同じものでありました。天皇の即位される日の儀式について、『養老神祇令』には、「凡そ践祚の日には、中臣、天神の寿詞を奏せよ。忌部、神璽の鏡剣をたてまつれ」とあります。恐らくこれは、「飛鳥浄御原令」ですでに規定されていたものだと思います。なぜ「飛鳥浄御原令」と申しますと、『日本書紀』持統天皇称制四年（六九〇）春正月戊寅朔に「物部麻呂朝臣大盾樹つ。神祇伯中臣大嶋朝臣、天神寿詞を読む。畢りて忌部宿禰色夫知神璽の鏡剣を皇后に奉上す。皇后天皇位に即く」とございます。そのため「大宝令」ですとこの後のことになってしましますので、これは「飛鳥浄御原令」で考えられたものではなからうかと思っています。

実は、中臣が天神寿詞を奏上する、忌部が神璽の鏡剣を奉上する、こういう儀式は、このときに始まったのではないかと私は考えております。理由は簡単でして、天武天皇より前の事例を拾ってみますと、だいたい群臣が印綬、印とありまして、そういうものを奉って、天皇は即位されています。ところが、持統天皇以降は、中臣と忌部がこのように奉仕するように変わってきたと言えるわけです。これは、天武朝・持統朝、先ほど岡田先生からもございましたが、大嘗祭が整えられます。さらに、斎王制度がきちつと整えられてまいります。それと軌を一にしているのです。忌部の氏の氏文と言いますか、そのようなものとして、『古語拾遺』がござります。ここでは、ひたすら我が氏は、鏡剣を天皇に献上するということを書いてあります。私も二十年以上『古語拾遺』を読み続けていますが、そのような記事ばかりでして、あやしい書物の一つなのです。

あともう一つ、『家傳』というものがござります。これは、藤原鎌足、また不比等らの伝記ですが、これを読むと、「中臣は世々祭事を掌れり。神人の間を相

和す」と出てきます。これもあやしいのです。なぜかと言いますと、この中に「天（都）水」のことが出てまいります。天水のことは、天神寿詞とも言いますが、天神寿詞にしか出てきません。

中臣にしろ忌部にしろ、律令制というものが出来上がった段階で神事氏族と改めて位置付けられたのではないかと考えております。

二、踐祚と即位の区別

さて、踐祚と即位の区別というのをここで書かせていただきました。元々、奈良時代まで、踐祚と即位は同じでした。ところが、平安時代初頭に踐祚と即位が区別されました。元来同じ意味であった踐祚と即位に区別が生じるようになったのは、何時からかと言いますと、平安時代初頭の平城天皇の時からです。それまでは、受禪即位（先帝から位を譲られる）でも、崩御後の即位にしろ、時間が経過した即位でも、即日即位でも、「即位」と国史には記されています。しかしながら、『日本後紀』に桓武天皇の崩御と、平城天皇の即位を見てみると、大同元年（八〇六）三月十七日条に「頃有りて天皇正寝に崩ず。春秋七十。皇太子哀号擗踊して、迷いて起たず。参議従三位近衛中将坂上大宿禰田村麻呂・春宮大夫従三位藤原朝臣葛野麻呂、固く請け扶けて殿より下りて東廂に遷る。次いで璽並びに劍櫃を東宮に奉る」（『日本後紀』 訳注日本史料、集英社、二〇〇三年）とあります。ここで注目すべきは、たんに「劍櫃」と書いてあることです。御剣でもなければ、宝剣でもないのです。その後、平城天皇は大同元年五月十八日に大極殿に即位されております。

東京大学の教授でいらっしゃった、もうお亡くなりになりましたが、井上光貞先生は、この平城天皇の時に行われた劍璽等承継の儀が、踐祚のはじまりであろうと指摘されておりますが、従うべき見解であろうと思われれます（『日本古

代の王権と祭祀」、東京大学出版会 一九八四）。つまり、劍璽等承継の儀は、踐祚と後世呼ばれるようになるのです。神璽之鏡劍は、元来即位の際に奉つられるものでありました。これ以降、先帝存命中であれ、崩御後であれ、踐祚の際に劍璽は新帝に奉上される事が一般的となり、踐祚の儀と即位の儀は区別されるようになったのであるとされます。

一方で、踐祚の儀について宮内庁のホームページには、「天皇陛下が皇位を継承されたあかしとして劍璽・御璽・国璽を承継される劍璽等承継の儀が、昭和六十四年一月七日、皇居において、国事行為たる儀式として行われました」とあり、劍璽・御璽・国璽を継承し、天皇として即位されたところ。こうして踐祚は劍璽を皇太子が受けられ、新帝となり、時間を経た後に、正式に即位する即位儀が行なわれるようになったのであります。やや難解ではありますが、こうした踐祚と即位儀を区別する理由を、『帝室制度史』に見ます。

神器伝承の儀は、上代に在りては鏡と劍とを奉上するの例なりしが、平安時代踐祚と即位と別あるに至りて、後は、神鏡は別殿に奉安して同座し奉らず、劍と璽とを上る例となれり。之を劍璽渡御の儀と謂ふ。劍璽渡御の儀は、先帝と新帝との御在所異なる場合には、左右近衛府の中將若くは少將を劍璽使と為し、先帝の御在所より移して之を新帝に上り、御同殿の場合には、内侍より直に新帝に上るの例なり。踐祚の儀を行ひたまふ時日については、皇位は一日もむなくすべからざるの大義に照し、天皇の崩御又は讓位の即日之を行ひたまふことを正則とす。

右によれば、昭和天皇は、ご存知のように御崩御され、その日、今の上皇様が踐祚されたわけでございます。踐祚の儀は皇位を一日も空位にしないことを目的としているのです。先学が多く指摘しているように、奈良時代後期から桓武天皇の即位まで、皇位継承には様々な葛藤がありました。そうした反省を受け、踐祚の儀即ち劍璽等承継の儀は案出された令外の即位儀であった可能性も否定で

きないのではなからうかと思っております。では、誰が案出したかというところ、恐らくは、桓武天皇ではなからうかと考えております。

三、踐祚（剣璽等承継の儀）の式次第

さて、宮内庁の発表によれば、この度の儀式は平安時代前期に編纂された『儀式』、先ほど、岡田先生からお話がありましたように、皇學館大学が非常に詳細な訓読や解説をされておりますが、これは清和天皇の頃に編纂されたものだと考えられております。その『儀式』の讓国儀を、司会をしてくださっている佐野真人先生が、以下左のようにわかりやすく儀式を紹介しているので、私が言うことは、何もないのですが、その引用をご覧ください。

『儀式』讓国儀の次第

- ①天皇があらかじめ本宮（内裏）から去り、御在所へ移る。
- ②二日前、固関使が発遣される。
- ③当日、太政官は式部省を召し、刀祢を会集させることを命じる。
- ④大臣は内記を召し、讓位宣命の作成を命じる。
- ⑤宣命の草案を内侍に付けて奏覧を請う。もし損益すべきことがあれば、勅處分による。
- ⑥返賜の後に大臣は本所に復し、黄紙に書かせて書杖を挟んで祇候する。
- ⑦式部省が親王以下の版位、中務省が宣命者の版位を設置。諸衛は中儀を服する。
- ⑧式部省が百官を率いて南門の外に列立する。但し、参議以上は門内に候ずる。
- ⑨天皇が南殿に出御する。
- ⑩内侍が大臣を喚び、大臣に宣命を執らせる。
- ⑪大臣は宣制に堪えうる参議以上を定め（宣命者の決定）、内侍に付けて奏覧

を請い、大臣は階下に候ずる。

- ⑫皇太子が春宮坊を出て、南殿の殿上の座に就く。
- ⑬大臣が南殿に昇り座に就く。
- ⑭近衛が南門を開き、大臣が舎人を喚び親王以下の参入を命じる。
- ⑮親王以下・五位以上は門内、六位以下が門外に列立する。
- ⑯参列者が所定の位置に就いたら、大臣は宣命大夫（宣命者）を喚び、宣命文を授ける。
- ⑰宣命大夫は南殿を降り、しばらく便所に立つ。
- ⑱大臣が宣命大夫と同じ階から南殿を降り、庭中の列に加わる。
- ⑲宣命大夫は進み出て宣命版に就く。
- ⑳皇太子が座から起つ。
- ㉑宣命大夫が宣命を読む。
- ㉒親王以下が再拜する。
- ㉓大臣以下が拜舞する。
- ㉔宣命大夫が本列に戻る。
- ㉕親王以下が退出する。
- ㉖中務丞が参入し、版位を取り除いて退出する。
- ㉗近衛が門を閉じる。
- ㉘「今帝」が南殿を降り、南の階から一丈ほどの場所で拜舞する。
- ㉙拜舞が終わり「今帝」は歩行して帰る。
- ㉚内侍が節劔を奉持する。所司は御輿に供奉するが、皇帝（今帝）は辞退して御輿には乗御しない。諸衛は警蹕をおこなう。
- ㉛少納言一人が大舎人等を率いて伝国璽櫃を奉持して追従する。
- ㉜少納言一人が大舎人・閹司を率いて鈴・印鑰を奉持し、「今上御所」に進る。
- ㉝近衛少将が近衛を率いて供御雜器を奉持し、同所（今上御所）に進る。

③④「今上」が春宮坊に御す。諸衛の警蹕・侍衛は常儀の通りである。（「讓国儀」儀式文の成立と変遷―新帝の上表を中心に―『神道史研究』通卷二七六号）

以上が讓国儀の式次第であります。その中で①番を見て下さい。この御在所とは、御院と言われるような所へ、天皇が遷られます。そして、⑨では、南殿に出て御されるとあり、これは御在所の南殿のことです。その後、参列者が南殿にきて、⑰にあるように讓位の宣命を宣命大夫が群臣に告げるわけです。その時は、⑳にありますがように皇太子は座から立ちます。これは、殿上の座です。そのあと、宣命大夫が宣命を読み、親王以下が再拝し、大臣以下が拝舞します。その後、「今帝」つまり新帝が南殿を降り、南の階から一丈ほどの場所で拝舞するわけです。拝舞というのは、みなさんご存知でしょうか。おそらくこれは、いまやられている拝舞とは違うと思います。昔、春日大社で、拝舞をする場面を見たことがあります。問題は③④番からのことです。贅言するまでもないかもしれないが、まず天皇は讓位に先立ち内裏を離れ、御在所に移られる。讓位の儀当日、皇太子が殿上に上がり、讓国儀が行われます。皇太子が起立すると、讓国の宣命が宣せられる。新帝が歩行してお帰りになる。ここで注目すべきは、内侍が節剣を奉持し、少納言一人が伝国璽櫃を奉持して追従したとあり、節剣と出てきます。

右讓国儀の次第をまとめると、皇太子は坊、春宮坊から先帝の御在所に参入し、劍璽等承継の儀が執行されたのであります。

四、璽とはなにか

さて、三種の神器とは八咫鏡、草薙剣、八坂瓊曲玉を指すといわれております。「神璽之鏡剣」といわれるように、元来神璽は鏡剣の形容語であったと考えられたのが、井上光貞氏です（前掲書）。従うべき見解であります。つまり、「神璽で

ある鏡剣」という意味です。そうすると、劍璽等承継の儀に出てくる璽とは何でしょうか。八坂瓊曲勾玉でしょうか。しかしながら、この時点で忌部氏によって新帝に奉上されていないことから考えて、恐らくそうではないでしょう。璽とは公式令四〇条に、「天子の神璽、謂はく踐祚の日の寿の璽をいふ。宝として用ゐられず」とあり、つまり実用品ではなく、宝の扱いを受けているものなのです。このような璽ではないでしょうか（訳注日本史料『日本後紀』補注大同元年三月十五日条補注、集英社 二〇〇三年）。なお、内印が「天皇御璽」と陽刻（字の部分が浮くように削られている）されているため、これを「天子の神璽」と見る向きもありますが、実用には用いないと公式令にある以上、実用に用いられている内印を「天子神璽」とは考えられません。

なお、黛弘道氏は、『律令国家成立氏の研究』（吉川弘文館 一九八二年）の中の「三種神器について」で、内印と相違し寸法の規定が見られないことから、勾玉を神璽と考えた方がよいとされています。つまり、内印は三寸と書いてあります。ところが、天子の神璽には寸法が書いてありません。そこから、勾玉と考えた方がよいのではないかとされています。

一方、平城天皇から宇多天皇までの讓国儀を詳細に検討された小林彦彦氏は、『踐祚で奉られる神璽は、印もしくは玉と鏡を含むものであった可能性を指摘される』（『國學院雜誌』第二二〇巻一号 令和元年）と述べられています。議論はあるものの、踐祚とは桓武天皇により、空位の時間を無くす即位儀礼、つまり、先ほど見た持統天皇の即位儀と大いに相違いたします。持統天皇の即位儀は、令制即位儀です。それに対して、踐祚の儀というのは、令外の即位であったとは考えられないでしょうか。そして、その儀式は桓武天皇の崩御後直ちに実行されたのです。さて、踐祚即ち劍璽等承継の儀は、「伝国璽櫃」という用語が、『貞観儀式』という儀式書に初見することから考えて、『貞観儀式』で制度化されたものと考えてよいのではないのでしょうか。次の光孝天皇までの踐祚と劍璽等承継の儀は、

どのように行われてきたのでしょうか。以下一瞥してみたい。

仁明天皇から讓位を受けた文德天皇への踐祚は、諒闇踐祚で『日本文德天皇実録』（原漢文以下同じ）嘉祥三年（八五〇）三月二十一日、「仁明皇帝清涼殿に崩ず。時に皇太子殿を下る。宜陽殿東庭休廬にまします。左右大臣諸卿及び少納言左右近衛少将など率いて、天子神璽・宝剣・符節・鈴印などを献ず」とあり、剣は「宝剣」と出てきます。

文德天皇から讓位された清和天皇の踐祚は、文德天皇同様、諒闇踐祚で、『日本文德天皇実録』天安二年（八五八）八月二十七日、「帝新成殿に崩ず。（中略）大納言安倍朝臣安人少納言近衛少将主鈴などを率いて、璽・印櫛などをもたらしめ、直曹にいれ奉る」としか出てきません。

清和天皇から讓位された陽成天皇への踐祚は、『貞観儀式』に則ったものと考えられるが、『日本三代実録』貞観十八年（八七六）十一月二十九日、「（前略）皇太子・天子の神璽・宝剣を受けて鳳輦に御し、春宮に帰る」とあります。

最後に、陽成天皇から讓位された光孝天皇への踐祚を見てみます。陽成天皇讓位は特殊なものでありました。『日本三代実録』元慶八年（八八四）二月四日、「（前略）ここに於いて神璽・宝鏡・剣など王公に付し、即日親王公卿歩行し天子の神璽・宝鏡・剣などを今皇帝の東二条宮に奉る。（中略）二条院と東二条宮相去ること東行数百歩」とあります。光孝天皇の踐祚にもしも宝鏡が奉られたとすると、前掲小林氏は玉もしくは印と宝鏡が奉られたとされていますが、しかしながらそうでも無いようです。佐野真人氏の御教示によれば、先帝と新帝の御座所が相違する場合、賢所の御動座があつたようで、堀河天皇・鳥羽天皇・崇徳天皇・近衛天皇・後白河天皇・二条天皇・六条天皇・高倉天皇・安德天皇・後鳥羽天皇の例があるという（佐々木恵介『天皇と摂政・関白』講談社 二〇一一年）。実際、鎌倉時代にできた『世俗浅深秘抄』には、「他の御所に行幸ある時は、賢所御間に渡す、必ず警固あり、或年始行幸の間、白地の時賢所渡御せず、十日ばかりの間その難

無し」とあります。つまり、天皇が他の御所に移られる時、賢所は必ず御動座し、年始行幸の場合には、賢所の御動座はなかったということです。

二条院と東二条宮との間は近いとはいえ、距離があつたため、賢所即ち宝鏡の御動座があつた。そのため、光孝天皇には三種の神器が奉られたとは考えられないであろうか。この事例は、そうした踐祚の儀の嚆矢である可能性も高いと考えられます。

このように見ますと、璽のほかに内侍の奉じた節刀であるが、もし草薙剣であつたとすると、延暦二十五年の平城天皇や文德天皇、清和天皇の事例のように、諒闇讓位の際、新帝に奉献されるであろうか。前にも少しく触れたように、神祇令には本来忌部が即位に際して奉献するとある。素戔鳴尊から天照大神に献上された神器を諒闇という穢れの中で、神祇官人忌部が新帝に奉上するとは、到底考えられない。前述の平城天皇の踐祚条にも「剣」としか記されておらず、「御剣」とは見えない点、そして非常に信憑性の高い『貞観儀式』にも「節刀」としか見えない点、同様に光孝天皇踐祚儀から推測するに、草薙剣ではなかった可能性もあるのではないのでしょうか。もちろん、清和天皇から陽成天皇への踐祚に際しては、「宝剣」と見えます。また、『西宮記』『北山抄』『江家次第』という平安時代を代表する儀式書類を見ましても、『北山抄』に「宝剣」と見える他は、どの書物にも「剣」と出てきます。このことから、この剣を草薙剣と断定できるではありません。もう一度後世の人に研究してもらいたいと思います。ただ大刀契という大刀が宮に伝来しておりましたので節刀とは、この中の一振である可能性も否定できないでしょう。

五、神璽とは何か

次に、養老公式令四〇条に見られる神璽とはなんであつたのであつたのでしょうか

うか。井上氏が指摘されているように令制では鏡剣の形容語として用いられたものと一般的に考えられます。ところが、公式令四〇条の神璽は明らかに相違する研究がある。大石良材氏が「大刀契―平安時代における神器観―」（『日本王権の成立』塙選書 昭和五十年）の中で、詳細に令制神璽について考証されています。以下大石氏の研究に導かれながら、論考を進めたい。

氏は名例律に見える

六に曰はく、大不敬、謂はく大社を毀ち、及び祭祀の神御の物、乗輿の服御の物を盗み、神璽・内印を盗み、（中略）（神璽とは、謂ふところは、令に依るに踐祚の日に、中臣天神の寿詞を奏し、忌部神璽の鏡剣を上る）

という記事と、賊盜律の

凡そ神璽を盗めらば、絞。関契、内印、駅の鈴は遠流。《謂ふところは、踐祚の日の寿璽》

という条文から、神璽は明らかに形容語としての神璽ではなく、物体だということがわかります。そうすると、公式令四〇条の「天子の神璽、謂はく踐祚の日の寿の璽をいふ。宝として用ゐられず」とし、神璽であると明言されている神璽を盗むとあることは、形容語としての神璽とは考えられないとされています。大石氏の指摘は正鵠射ているといえましょう。

さらに、大石氏は荻野三七彦著の『印章』（神璽と印章）に見られる応長二年（一二三三）正月に執行された璽の筥の御搦に関する『花園天皇宸記』の興味深い記事を紹介されています。荻野氏の訓読をここに紹介します。

関白（藤原冬平）璽筥の事注する所のもの一巻これを待す、是れを披見するに、この文云、璽筥中には印を入ると云々、これ高家口伝云々、又抑も璽筥は神代より未だかわらず、若しくは印を納むるかは関白の説なり、日本書紀・古事記等を通勘するに玉たるか、但し此のこと冬平公に尋ぬるの処、異朝に於ては伝国の璽は玉たるの由分明、神璽に於てはは彼に同じからず、霊物と

して知らざるの由これを称す、但し慈鎮和尚記に分明の趣これあり、八勾玉本文は疑うべからざるか、

とあります。花園天皇と関白冬平のやりとりの中でも、高家（朝廷カ）の口伝では印とある。しかしながら「日本書紀・古事記等を通勘するに玉たるか」と、天皇と関白の議論も決着がつかなかった。それはそうであろう。誰も璽の筥の中身を見たことが、なかったわけであるからです。

ところが、前掲大石氏によれば、花園天皇と関白冬平の議論に決着をつける文書が存在する。それは京都青蓮院所蔵の慈円の「夢想記」で建仁三年（一二〇二）に書写され、さらに承元三年（一二〇九）に書写されたものに以下のようにある。

又去る寿永乱逆之時、安徳天皇浮しめ給の時、同三種宝物御隨身の間、合戦の時、天室外祖母六波羅二位之を懷き奉りて、海底に入り了、此の時内侍所大納言時忠取り奉り、安穩に上洛す、宝剣は遂にもって海底に没し了わんぬ、永く失い了んぬ、又神璽の箱は海上に浮かぶの間、武士何物か知らず、慙に之を見る、その時尹明法師の女子内侍たるの間、粗伺い見る、二つの懸子なり、上下各のおの珠玉を四果（ママ）を入れるなり、都合玉八果これありと云々、粗あらこれを伝聞するに記文に云わく、見證いわく、今夢想の三箇事もって符合す。珍重不思議、言語道断、よって故に此の葉子を記置（『青蓮院文書』第五卷）（原漢文 續天台宗全書 平成二年三月）

大石氏も指摘しておられますが、秦の伝国璽の系譜を引く、唐代の天子八宝の数と一致しているのである。やはり伝国璽なのだろうかと考えさせられます。前掲の花園天皇宸記を受け、井上光貞氏は、前掲書の中で、「他方「璽」が神器一般をさしたか、印・玉等の器物をさしたか詳らかにしがたい」とされ、「璽筥中の器物は印か玉（勾玉）」の二説があるとされている。しかしながら、青蓮院所蔵の「夢想記」から玉であった可能性は確実になったように思われます。

結 び

皇位の継承に様々な問題のあった奈良時代から平安時代初頭にかけて、ひとまず神代からの伝来物を用いず、新たな璽・剣を媒介として執行される剣璽等承継の儀（踐祚）の案出により、皇位継承は円滑化されたものと考えられます。剣璽等承継の儀を中心とする踐祚とは、空位を無くすため平安時代初頭に成立した新たな即位儀礼であり、即位とは神祇令に規定された古来からの即位儀礼といってもよからう。換言するならば、令制即位儀礼と言ってもよいでしょう。古来からの即位儀礼は、先帝崩御の時には必ずしも直ちには挙行されていない。この空位の時間に反乱事件や皇位の篡奪を企図されることが多かった（例えば、他戸親王・廢太子・氷上川繼配流・早良親王・廢太子）。しかし、踐祚（剣璽等承継の儀）の案出により、未然にそうした事態が防がれるようになったのです。また、前代の宗教的側面が後退したと考えられます（内田順子「讓国儀の検討―九世紀王位就任儀礼の検討―」『古代祭祀の歴史と文学』塙書房 一九九七年）。即ち踐祚の儀は令外の即位と言っても過言ではないのではなからうか。

皇位の継承は、相続者の問題や、外戚の問題など、常に危機的状況にあった。仮とはいえ、踐祚の儀という即位儀礼が案出されたことは、皇位継承を容易にしました。しかしながらその容易さが、事態を紛糾させることもあった。花山天皇は、藤原兼家の謀略により、自身の子供ではない一条天皇に讓位させられたが、『大鏡』によれば、内裏を出ようとされたとき、「（月が）明るいのでいかがしよう」と兼家の子の道兼に躊躇いの詞を發せられた。しかしながら、道兼は「さりとて、皇位におとまりなさりようがございません。神璽・宝剣が一条天皇に渡ってしまったのですから」と、花山天皇を無理矢理退位させてしまったのである。

踐祚が、後世に花山天皇のような悲劇をもたらしたのは、事実である。しかしながら、奈良時代末期困難を極めた皇位継承を円滑に執行させたのも事実である。

平安時代以降、恐らくは桓武天皇が發案されたであろう踐祚の儀が、皇位継承に安定をもたらしたことは、間違いないのではなからうか。

もう一度申しますと、時代が降りますと踐祚の儀で充分とされたようです。内田順子氏は、従来の即位礼の宗教的側面が後退したとされている（内田氏前掲書）。これは、たいへん興味深いことでありますし、天子の神璽は、玉であった可能性が、非常に高いと考えられます。新しい踐祚の儀で神道祭の側面が後退したと前掲書の中で述べられています。また、前代の宗教的側面が後退したと考えておられます（内田氏前掲書）。

以上、お粗末な話となりましたが、ご清聴ありがとうございました。

【佐野】 藤森先生、ありがとうございます。会場設営のために十分ほど休憩時間とさせていただきます。

〔相互討論〕

【佐野】 時間になりましたので、休憩前に引き続きまして再開したいと思います。三人の先生方の基調講演とご発題でございました。先生方それぞれが、お力を入れたご発表をして頂きました。本当なら先生お一人お一人に一時間の講演をしていただいても良いような、ご内容を頂戴いたしました。先ほども、補足がまだあるということで、私の取りまとめのコメントを簡潔にさせて頂きたいと思います。改めまして、申し遅れましたが、皇學館大学研究開発推進センター神道研究所の佐野が司会を務めさせて頂きます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、所先生の基調講演でございますが、令和大礼の成果と課題というところで、まだ立皇嗣の礼が四月に控えておりますが、無事に大嘗祭、そして御親謁、賢所御神楽の儀と一連の皇位継承儀礼が恙なく終了いたしました。そこで、今回は讓位という、いわゆる二〇二年ぶりの皇位継承となりました。しかし、二〇二年前や平安時代の讓国儀とは違った儀式が行われ、今回は退位礼正殿の儀というもの

が新設されました。そこで、問題となりましたのが、改元の問題です。四月一日に新元号発表、五月一日に施行、上皇陛下がその御在世中に、元号を改める政令にご署名になるということで、これは儀礼、あるいはこれまでの考え方として問題が残ることとなりました。また、譲位のことについては、今回は皇室典範特例法を制定する形で行われましたが、これから日本の高齢社会が進だときには、一つの方法として、あくまで一代限りの特例だとしても、検討を進める、あるいは制度として考えていく必要があるというご指摘でした。

岡田莊司先生のご発題でございますが、天武天皇・持統天皇の大嘗祭の御創始、そして式年遷宮の御創始、それから斎王制度・斎宮制度の關係。これが、天武天皇・持統天皇の頃に集中して行われていること、新嘗祭と大嘗祭との關係について、岡田先生がよく言われておられます、もともと大嘗祭は素朴な祭りが本質にあるとのことでございますが、それが現在はどうかということも含めて今後は検討していかなければならない課題だと思います。

最後に、藤森先生のご発題は、非常に重要なご指摘でございます。踐祚の儀に見える剣というのは、宝剣、あるいは『貞観儀式』では、節刀と書かれているということから、一般に三種の神器の一つと言われている草薙の剣と断定してよいか、という問題提起でございました。それから、神璽について、天子の神璽について一般的に言われている勾玉あるいは印ではなく、玉が納められているというご指摘でありまして、今後、踐祚の日に用いられる皇位に由来するものが如何なるものかということ、考えていく必要があるだろうと思います。

補足の方がたくさんあるということでございますので、まずは、所先生からお願います。

【所】今回の御大礼も盛大かつ厳粛に行われたという結果を見ますと、おおむね良かったと思います。ここに至る先人たちのご努力を想起して、感謝し心に留めておきたいと存じます。それと同時に、我々の世代で将来に向けて、何をすべき

かを考える必要があります。

先ほど敢えて論及しませんでした、これからも皇室が続いていかれるためには、一体どのようなことが必要なのかという議論を、近くせざるを得なくなると思います。それは、「皇室典範特例法」ができたときにまとめられた「付帯決議」に求められているからです。提起されている課題は、政府だけでなく我々国民としても真剣に考える必要があります。そのことに関連して申し上げたいのは、原理と原則をはっきりと分けて考えるべきだということです。

およそ原理というのは、絶対に変わらない動かすべからざるセオリーです。それに対して、原則というのは、状況により必要に応じて例外を認め変化していくルールだと思います。

今回の例でいえば、やはり明治以降の終身在位は、皇位継承の原則とされましたが、必ずしも原理ではありません。そういうことに気づかれた平成の天皇は、飛鳥時代の皇極天皇から江戸時代の光格天皇にいたるまで、六十例近い譲位例があるのだから、その可能性を考えてほしいとおっしゃったのです。終身在位は、明治以降に定められた皇位継承の原則ではあっても、長い歴史をみれば、必ずしも原理ではありません。

ところが、明治以降の在り方を、古代から行われてきた原理のように錯覚して、絶対に変えてはいけなさと決めつけてしまう論者が少なくありません。もちろん、長い歴史をふまえて、近代日本にふさわしい在り方として終身在位を制度化したことは、それ相應の意味があります。しかも、現行典範にも定められていますから、当分は原則として尊重すべきものであります。

とはいえ、即位礼も大嘗祭も元号も、長年の原則を大事にしながら、折々に変化を加えられ、それが今回実施されたわけです。そういう意味で、我々が歴史を顧みる時、はたして不変の原理というものが本当にあるのだろうか、ということ、を冷静に考えていきたいと思っております。

私どもが歴史に学ぶということは、明治以降の在り方を絶対視しないで、千年・二千年の歴史の在り方も振り返りながら、その中の残すべきところは残し、変えるべきところは変えていくことこそ、本当の意味で伝統を受け継ぎ未来を拓いていくことになると思っています。

【佐野】では、続いては岡田先生、補足の方をお願いします。

【岡田】最後に、もう一つ紹介しておきたいのは、津田左右吉先生のご論です。戦後書かれました「建国の事情と万世一系の思想」（『世界』昭和二十一年一月号、『津田左右吉全集』第一巻所収）の文章を読みたいと思います。戦前は、上代史の研究、特に日本書紀等の古典籍、神話と歴史の部分について批判を加えたということで、発禁本になり、津田の論は否定されました。戦後は「進歩的文化人」として活躍してもらおうという期待もあったのですが、この文章の中に津田左右吉先生の真意が書かれています。

国民自ら国家のすべてを主宰すべき現代においては、皇室は国民の皇室であり、天皇は「われわれの天皇」であられる。「われらの天皇」はわれらが愛さねばならぬ。国民の皇室は国民がその懐にそれを抱くべきである。二千年の歴史を国民とともにせられた皇室を、現代の国家、現代の国民生活に適応する地位に置き、それを美しく、それを安泰にし、そうしてその永久性を確実にするのは、国民自らの愛の力である。国民は皇室を愛する。愛するところにこそ民主主義の徹底した姿がある。国民はいかなることをもなし得る能力を具え、またそれを成し遂げるところに、民主政治の本質があるからである。そうしてまたかくの如く皇室を愛することは、おのずから世界に通ずる人道的精神のたいなる発露である。

とあります。これは、昭和二十一年に発行されていますけれども、実際に敗戦にあつたなかで、これから天皇制も、あるいは日本の国家も、どうなるかわからない中で書き上げています。民主主義も具体的に進んでいない中で、皇室と国民の関係

を説明しているのです。先ほど、所先生も、昭和の時代は、厳しい時代で、反天皇・反神社というものがあつたとおっしゃっていました。それが、だんだんと薄められていく、特に象徴天皇制のもとで、天皇の祭祀と天皇の祈りが国民の中にも受け止められてきたのが、平成のここ三十年間であつたと思います。まさに平成の世を、津田左右吉先生は七十年前に、見通されていたのでしょうか。津田先生はようやく安堵されていることでしょう。戦前と戦後における混沌とした中で、当時の見識、また学問における立ち位置などをはつきりとさせていました。その学問姿勢、その想いというのは、私たちは大事に受け留めていかなければならないと思っています。

【佐野】藤森先生お願いいたします。

【藤森馨】私は、補足すべきことではないのですが、実は、番組名を言っていないのですが、報道ステーションを御譲位が決まった段階で見えておりましたところ、憲法学者というのが出てきて、三種の神器が継承される以上、これは宗教儀礼だ、などと訳のわからないことを叫ばれたのです。では、本当に、宝剑と勾玉なのかということについて、関心を持ち、意地になりまして、この度のような、皆さまにしてみると、何を考えているのだと、言われるようなことを発表させていただきました。実は、元になったのは、『悠久』という雑誌に書かせていただきました。それを持参して、宮内庁のある高官のところに参加しました。その時に、念を押したという失礼に当たるかもしれませんが、空位はないですよね、と聞きました。現実には、空位があつた、と言われますと困ってしまうということ、その後もお話したのですが、本当は無いのだけれども、宗教上の問題で、とその時もおっしゃられていました。困ったものだなということ、このような論文を書いたわけです。皆さまからしてみると、三種の神器ではないと、何でそれはないのか、という疑問があるかと思いますが、正直な今の研究成果を出させていただきました。先ほど、岡田先生に思想的にどのように考えて

いくのかということを問われまして、特に北畠親房が浮かんだのですが、これが難しくてですね、こちらにいらっしゃる岡野先生が第一人者でございますので、岡野先生にお伺いしていただければありがたいと思います。

【佐野】藤森先生の二枚目の資料に見られる『皇室制度史』を見て頂きまして、「天皇の崩御又は譲位の即日之を行ひたまふことを正則とす」となっておりますが、今回の儀礼は、法律的には、日付が変わった瞬間に皇位が継承されて、儀礼としては、退位礼正殿の儀が四月三十日の夕刻、剣璽等承継の儀は五月一日午前に行われました。この辺りは、所先生が問題提起された元号の問題と非常に関わってくるものであろうかと思えます。

例えば、昭和天皇が崩御された昭和六十四年一月七日午前六時三十三分に、当時皇太子の明仁親王が御踐祚になり皇位を継がれ、その後、臨時の閣議をもって、新元号の平成の決定を見て、元号を改める政令にご署名され、翌日に施行されたわけでございます。

今回の事例を考えると、四月三十日に報道の言葉を用いますと退位、五月一日に即位ということが先に決まっております、その時の儀礼をどうするのかということが後回しとなり、日付だけが先行して決まってしまったということがあろうかと思えます。

仮に、崩御の時の例を参照すれば、四月三十日の午前に「譲位の儀」が行われ、譲位という言葉が天皇の個人的意志に入るか入らないかの議論があるところですが、でも、「皇室典範特例法の定めるところにより退位する」とお言葉を述べられ、その瞬間直ちに新帝御踐祚とし、午後から元号を改める政令に新帝陛下の御署名をいただき五月一日施行という形が先例を重視した在り方ではないかと考えられます。あるいは、昨年の十二月九日には、改元が五月二日にずれ込むかもしれないという報道が出ておりました。今回だけの特例ということですが、今後はさらに皇位継承の儀礼のあり方について議論し、どのようにしていくのがふ

さわしいのかを考えていく必要があると思います。

【所】今の件は、私が参加しております研究会でも、どうあるべきかということが昨年来議論してきました。簡単に申しますと、法律的な定めとしては「特例法」があり、それにより皇室会議で決められたのは、四月三十日限りで譲位され、翌五月一日から新天皇が即位されるということです。この法制を重視すれば、それに伴う儀式をどうなさるかということは、一応区別して考えられます。

先例をみても、明治天皇の場合、孝明天皇が慶応二年（一八六六）十二月二十五日に崩御され、翌三年正月九日に踐祚されました。そのため二週間ほど、いわば空位になっていますが、当時はそれでよしとしました。けれども、明治天皇が皇位を継がれたのは何時からなのかということがはつきりせず、『明治天皇紀』も微妙な書き方をしております。藤森先生が先ほどのべられましたとおり、空位をなくするということは、理念として当然であります。ただ、事実としては、多少間隔がありました。

しかし、近代法の観念から可能な限りそうならないように決められ、先帝崩御の何時何分何秒をもって新天皇が即位されたことにしたわけです。ただ、その事と、それに伴って必要な儀式・行事をどうようにして実施するかは、準備を要することですから、それは政府と宮内庁で検討し、踐祚の儀にあたる「剣璽等承継の儀」とそれにつぐ「即位後朝見の儀」は、どのようにセットでやっていたいたらいかなにかということを、研究会でも相当に議論しました。

そして、私どもが一致した意見と要望は、大筋ほぼ実施されました。しかも、良い意味で驚きましたのは、二百年ぶりの譲位に関する儀式が「退位礼正殿の儀」と名づけられたことです。当初政府は、御譲位を「生前退位」と称し、なるべくそっと引いて頂くため何もやらない考えであったといわれていました。

しかしまもなく、有識者に意見を求め、天皇の御譲位＝退位は、新天皇の御即位と相對することだから、御即位に関して、「即位礼正殿の儀」という名前の儀

式をするのであれば、当然それに相当する名称の儀式があると提案して、「退位礼正殿の儀」ができました。内容は僅か十数分の儀式でしたけども、格式としては即位礼と同等の名称となったのです。正式な名称は大事でありまして、御譲位というものが、御即位に対応する重要なものだとすることを、儀式の名称で示した意義は大きいと思っております。

ただ、一つ残念なことは、退位の儀にも即位の剣璽等承継の儀と即位後朝見の儀にもまた即位礼と大嘗祭にも、未成年の皇族が出られなかったことです。未成年といっても、新天皇陛下の皇女愛子内親王は当時すでに十七歳ですし、秋篠宮殿下の長男悠仁親王は十三歳です。近い将来、皇室で重要な役割を果たされることが見込まれるお二人には、ぜひ出ていただきたいかっただけだと思います。

念のため、先例を申しますと、大正四年（一九一五）十一月に行われた御大礼当時、後の昭和天皇の裕仁親王は、十四歳の少年であられましたから、政府はお出まし頂かないという方針でした。しかし当時、東宮御学問所の「倫理」御用掛であった杉浦重剛先生が、「そうではない、この方は将来天皇になれるのだから、即位礼を実際に見ておかれるべきだ」と強く主張されて、列車で京都へ向かわれ、即位礼に参列しておられます。

重要な儀式・行事は、お若い時から体験して頂くことが大事なのです。今回それがなされなかったことは残念であり、今後ぜひ考え直してほしいと思います。

【佐野】 ありがとうございます。時間もだんだんと無くなってきましたが、一応、相互討論でございますので、先生方でご発表をお聞きになって、聞かれたいことがありましたら、質問をお願い致します。

【所】 一つ、藤森先生がおっしゃった、節剣という用語がございます。その節剣は何をさすと考えておられますか。

【藤森馨】 節剣は、私の個人的な見解ですが、大刀契の一つなのではないかというふうに考えております。『村上天皇御記』をのぞいて、四十幾つかの太刀があったというふうに出てまいります。そうしたものの一つであろうと、現在は考えて

おります。大刀契自体は、だんだんと神器と同じ様な扱いになってきます。行幸にも随伴するようになってまいりますので、そのあたりは、やはり時代時代によって、変わってきたのだと考えております。

【佐野】 今こちらで相談をいたしまして、先ほど岡野先生のお名前が挙がっておりますので、岡野先生、コメントのほうをよろしく願います。

【岡野友彦】 皇學館大学の岡野でございます。すいません、何も用意してなかったのですが、三種の神器を北畠親房がどのように考えていたのか、というのは大変大きな問題です。そのことについて私は、よくわかりません。わかりませんが、今日の岡田莊司先生の配られた資料④をご覧になって頂きたいと思えます。第九十六代後醍醐天皇の後、九十七代から九十九代の天皇は、吉野で即位された、いわゆる南朝、吉野朝廷の天皇です。このお三方は、大嘗祭をなさっておられないわけですね。三種の神器があったところでは、大嘗祭をやっていない。逆に、光厳・光明、崇光天皇は、特殊ですが、後光厳・後円融、そして後小松天皇は、永徳三年（一三八三）に大嘗祭をしておられるのですが、南北朝を合一したのは一三九二年ですから、後小松天皇は北朝の天皇として大嘗祭をしておられるわけです。次いで、岡田先生の資料①に後円融天皇大嘗祭について、二条良基の『永和度大嘗会記』を挙げておられますが、この時期の北朝の朝廷が大嘗祭をきちんとやろうということをかなり意識しているのは間違いないで、それは三種の神器が無いからであると。ですから、天皇は、なぜ天皇であるのか。たいへん恐れ多い問題ですが、三種の神器を継承しているからだ。という事と、大嘗祭をやっているからだ。というのは、もちろん二つが大切なのですが、どちらかが欠けたときに、そのもう片方をとっても大切に議論しようとする。こういう力学が南北朝期、私が専門としている時期には大きく働いていた。その中に親房の『神皇正統記』も位置付けるべきで、だから、親房が、どう言っているからというのは、親房のバイアスがかかっておりますので、事実、三種の神器がどうであったのかという問題については、慎重に議論していくべきであるというふうに思います。お

答えになっっているかわかりませんが、そのような感じです。

【佐野】岡野先生、ありがとうございます。先生方もあちらこちらでシンポジウムをされておられますので、皆さま、内容をご存じの部分が多いと思います。折角ですので、御即位の儀礼ということですので、加茂先生にコメントを頂戴したいと思います。

【加茂正典】皇學館大学の加茂でございます。大変興味深い、ご発表ありがとうございます。ありがとうございました。所先生のお話の中で、天皇陛下と皇后陛下が並んで、即位式にられるというのは、大正天皇の御大札からという話でしたが、少し誤解があったようで、即位式において、天皇陛下と皇后陛下が高御座と御帳台が並ぶというのは、『貞観儀式』から出ております。朝賀の儀と即位の儀は同じ形態をとつています。

岡田先生の方のお話については、東京でもお聞きをしまして、一点だけお聞きいたします。もし言われている遙拝の祭祀であるということであれば、特に中央の神座は、必要のないのではないか、また豊受宮の御饌殿祭祀であれば、当然、神座はないわけですので、御饌殿祭祀を京都で行っているというのであれば、中央の神座は舗設される必要があるだろうと思っております。この点だけです。岡田先生の資料①にある、離宮院神膳というものがどうであつたのかも聞きたいところですが、それはおいておきます。

それから、藤森先生のこの問題は、大変に難しい。さまざまな点が話としてはあるのですが、いわゆる後に踐祚といわれるもの、いわゆる三種の宝器、それを分けてしまうことが後に、踐祚ということになるのですけれども、そのところを、私としては三種の宝器というものは、むしろ奈良時代には橘奈良麻呂の変など皇位継承で紛争がありますが、そのときに一番問題になるのが、いわゆる三種の宝器ではなくて、内印とか大刀契です。いわゆる兵を發遣するもの。それがむしろ所在の問題になりますので、これを次の新帝に渡してしまうという、そちらの方に力点があつたように思います。もう一つ、例の安徳天皇の事件ですが、そこに

ある青蓮院の覚書を見るに、宝剣の方が海水に没していますので、その時できた璽の箱というのが状況を考えますと、実態は、勾玉しかあり得ないわけであります。それから、伝国の璽については、いくつかの解釈がありますけれども、本来、唐皇帝が位を譲る時に、伝えられる天子八宝の内の一つが伝国の璽であります。なので、伝国という概念がもう少し、ご説明が少なかつたように思われます。以上です。

【佐野】ありがとうございます。コメントにお答え頂こうかと思えます。岡田先生お願いします。

【岡田】加茂先生からのご指摘ですが、悠紀殿・主基殿に作られる神座があるのにも関わらず、伊勢に向かって遙拝祭祀をされるのかということでした。天皇のお祭りとして、基本的には各時代においても遙拝祭祀でありました。正月元旦の四方拝から始まって、臨時の遙拝もそうですし、式年遷宮も庭上から伊勢の地を強く意識していました。神殿中央に神座があるということにつきまして、そこに神がいらつしやるのだと観念する。特に悠紀殿・主基殿、二殿合一ということ、これは実際に掌典職を奉仕された方が燈明をつけたその時点で、そこに神がいらつしやるのと観念するのだということです。元々からそういう式なのか、新しい式なのか、私としては、時代によって神観念と迎え方が若干変わってくるだろうということで、あくまでも中央の神座は見立ての座であつて、そこに対して、いろいろな所作というものはないわけです。そうすると、具体的に近代の作法である神降ろしをしたりする作法はないわけで、そこは天照大神という神の存在が、天皇にとって非常に重いわけです。具体的に神をどうする、こうするということを、むしろしない、してはならないというタブー性があつて、だからこそ、あのような形の二重的な、一方では中央の神座を設け、一方では遙拝の神座を設けるという構造になつていったのではないかと、今ではそれしか説明できないのが現在の考えです。これは説明が難しい祭祀の根源にあるものと思っております。さらに祭式とおして理解を深めていきたいと思えます。

【藤森】いま、岡田先生のご説なのですが、じつは、天皇が不予もしくは物忌みの時、天照大御神を遥拝する形を採っております。また、公卿勅使が派遣された場合、行つて帰ってくるまでは、遥拝して天照大御神を拝祭するというのが鉄則でした。そういうことから考えますと、私は、遥拝祭祀の方が理解できるかと思っております。次に私に果たされた質問ですが、加茂先生のおっしゃる通り、内印と大刀契、これが一つ重要になってきます。ただ、内印・大刀契の時代から少し降ってまいりますと、それだけではなくて、天皇の位に就いたことを表すものになつてくるわけです。例えば、藤原仲麻呂の乱、この時は印が問題になりましたが、天皇御璽と劔という、こういうものは大きく注目されるようになってきたのは、平安の証拠であると考えております。平安時代になって、内印と鈴、それが一緒に御同座するというのは、当然でありました。奈良時代にさまざまな例が蓄積されて、その結果が、先ほどから申している神璽と劔の時になっていったのではないかと考えます。あと、伝国の璽はどういうものなのかということですが、いまさら説明するまでもなく、今の注釈書などを読みますと、元々秦の始皇帝が制作させたのが始まりで、始皇帝は、まさか二世皇帝で終わると思つてもみなかったわけで、そのような伝統を引き継いだうえで、唐代に天子八宝というのが作られたのではないかと。そうしますと、ちょうど日唐関係が盛んな時代でしたから、その影響を受けたのではないかと考えております。

【佐野】少し私からも補足で、加茂先生の説明の中で、即位と朝賀のお話がありまして、専門家もおられますが、一般の方と学生もおりますので、わかりやすく補足させていただきます。元日の朝賀は、百官が大極殿に集まりまして、天皇に新年の賀を申し上げ、前年の祥瑞を報告する儀式が新年に行われております。この時も天皇は、高御座に御昇りになりまして、基本的に中国の皇帝のような冕服をお召しになって、出御されます。その時の出御の仕方が、即位礼と朝賀が一緒に在り方でありまして、庭上に置かれます旗等も即位礼と同じです。このような

点から即位と朝賀は同一の儀式的構造をしていると言われております。また、『貞観儀式』では、即位の儀に皇后がお出ましになることは書かれておりませんが、元日の朝賀の方には、皇后の御座が設けられて、出御される儀式次第があるというのを補足させていただきます。

【所】先ほど御親祭の内情について議論がありましたけども、そのことを考える上で、宍戸忠男さんの書かれた「貞享度大嘗祭再興致―東山御文庫蔵靈元院宸筆御記録を基に―」（『神道宗教』二五四・二五五号、令和元年七月）という論文が大変参考になります。ここに紹介されているのは、土御門天皇の御記録を東山天皇の時に写されたものなのですが、その内容を拝見すると、どれほどの思いを込めて大嘗祭をなさつておられるのかということが、実によくわかります。大嘗祭の時に御神饌をお供えになりますが、それは、窪手や平手という簡素な器からピセンセット状の御箸で、お摘みになるのが四百四十四回にもおよぶそうです。

今回、天皇陛下が悠紀殿の儀を終えて廻立殿へ移られるお姿をテレビで拝見しましたが、かなりお疲れなのではないかという印象を受けました。しかし、主基殿の儀を終えられてお出ましになるときは、お疲れでしょうけれども、実に晴れやかなお顔とお見受けしました。まさに全身全霊を込めて、祭りをしておられた御姿を拝察することができました。神祭りとは、そういうものかと想察いたしました。天皇のお祈りとは、これほど懸命になさる一代一度の大嘗祭であり、毎年十一月の新嘗祭なのだと感じ取ることができたように思います。

【閉会】

【佐野】これで、お時間がまいりました。以上をもちまして、令和元年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム「皇位継承を考える」を終了させて頂きたいと思ひます。皆さま、ご熱心に聴いてくださり、誠に長時間ありがとうございました。

平安時代の神祇觀
一、令制卽位礼
踐祚と即位は、元々同じ意味で使われていた。天皇の即位される日の儀式について「踐
祚祇會」には、
凡そ踐祚の日には、中臣、天神、天神の奏詞を奏せよ。忌部、神體の鏡剣をなてまつれ。
とあり、

持統天皇御四年（六一九）春正月戊寅朔、物部皇朝臣大盾御子、城武臣中臣大嶋
朝臣天孫神武尊を讀む。畢より、忌部宿禰色史知神祇の饗饗に奉ず。皇后天皇
位に、御（日本書紀）

釈にいわく、踐祚、天皇即位す、これを踐祚という。祚とは位なり。福なり。

とある。「養老神祇令」よりさらに古い「大宝令」の注釈として天平十年（七三八）に成

戦神の目、答う。

とあり、平安時代どころか奈良時代にも賤祚と即位の区別がなかったことがえる。

二、踐祚と即位の区別

元来同じ意味であつた皇位と即位は、やがて別れた。皇位は、なせだうか、
踐祚に即位が、明確にわかれ、平安時代初期頃乎平城天皇の時かである。それま
で、は受禪即位でも、崩御後の即位としても、時が経過した即位でも、即日即位でも「即
位」と國史には記されてゐる。しかも、から、「皇統記」に桓武天皇崩御と、平城天
皇の即位が見えてゐる。

大同元年(八〇六)三月十七日 頃有りて天皇正寝に崩す。春秋七十。皇太子哀号擗
 師して、迷いて起たず。參議從三位近衛中將坂上村麻呂、春宮大夫從三位藤
 原朝臣葛野麻呂、固く諫け挾て殿より下りて重甌に遷る。次いで薨びに劍櫓を東

さて、宮内庁の発表によれば、この度の儀式は平安時代前期に編纂された『儀式』に依拠して執行されたという。その『儀式』の護国儀を佐野真久氏は、以下左のようにわかりやすく儀式を紹介している。

- ① 王宮があらあらしめ本宮（内裏）から去り、御座へ移る。
- ② 三日間、閑閑使が遊進する。刀祿を会々せむることを命じる。
- ③ 言曰、本宮宣は式部省を白し、刀祿を会々作成を命じる。
- ④ 大臣は日記を召し、職位宣命作成を命じる。
- ⑤ 宣命の家を内侍に付けて養親を請う。もし墳墓へきこことがあれば、動廻分によ

- ⑤ 皇太后は陛下の版位に便し、尊嚴を失はぬとて書状を呈出して御候る。
- ⑥ 式部省親王・大臣以下は版位の中務省・中納言の地位を認認。諸衛の中儀を取る。
- ⑦ 式部省・中納言を率いて南門外に列立する。但し、参議以上は門内に候する。
- ⑧ 天皇が殿に御出する。
- ⑨ 内侍が白を喚び、大臣に貴位執らせる。
- ⑩ 大臣は前に堪える参議以上を定め(貴者の決定)内侍に付て奏覧を請い、大臣は殿に候する。
- ⑪ 皇太后が春宮坊を出て、南殿の殿上の座に就く。

る。

⑭近衛が南門を開き、大臣が倉人を喚び親王以下の参入を命じる。

⑮親王以下、五位以上は内門、六位以下が外門に列立する。

⑯参列者が所定の位置に就いたら、大臣は宣命大夫(宣命者)を喚び、宣命文を授け

- ① 宣命大夫は南殿を降り、しばらく中門に立つ。
- ② 大臣が宣命大夫と同じ階から階閣を降り、庭中の別に仕わる。
- ③ 宣命大夫は道み出で宣命殿に就く。
- ④ 宣命天子殿から起つ。
- ⑤ 宣命大夫が宣命を読む。
- ⑥ 親王次が再拝する。
- ⑦ 大臣以下が拝舞する。
- ⑧ 宣命大夫が本列に戻る。
- ⑨ 親王次が退出する。
- ⑩ 中務省参入し、殿位を取除て退出する。

②9 拝舞が終わり「今帝」は歩行して帰る。
③0 内侍が節剣を奉持する。所司は御輿に供奉するが、皇帝（今帝）は辞退して御輿に
は乗御しない。諸衛は警蹕をおこなう。

宮に奉る。『日本後紀』訳注日本史料、集英社、二〇〇三年)

とあり、剣璽等承継の儀が記され、その後大同元年五月十八日、

大極殿に即位す。

とあるように、即位の儀が記されているのである。井上高延は、この中興寛弘の時に「一日」とあるのを、即位の儀が「踐行」のはよりであるというが、従ってきき真解であらう（『日本古代の王権』—東京大学出版会—一九四一）。つづいて、剣璽を奉進の儀は「踐行」と後世呼ばれるようになるのである。神璽・鏡剣は、元弘即位の際に奉つたものである（つづいて、これ以後、先帝存命中であり、明宗後であり、踐行の際に剣璽は常に献上される事が一般的となり、踐行の儀と即位の儀は区別されるようになったのであるといふ。とどこでも、踐行の儀について宮内庁のサイトページには）

天皇皇后上皇位を繼承されたあかつきには、皇居において、皇行爲たる儀式として行われま

した

踐の儀が、昭和元年一月七日、皇居において、皇行爲たる儀式として行われま

した

とあり、劍璽・御璽・國璽を繼承し、天皇として即位されたのである。こうした踐祚は劍璽を皇太子が受けられ、新帝となり、時間を経た後に、正式に即位する即位儀が行なわれるようになったのである。やや難解ではあるが、こうした踐祚と即位儀を区別する理由を、『皇室制度史』に見てみよう。

神樂云承儀は、上代に在りて鏡と劍とを奉土する例なりしが平家時代踐祚と即位と別るに至りて、後には御璽は別號に奉安て同殿し奉らして劍を所屬上の例となれ。之を刺殺御所の儀は、先帝と御生所屬より移して左右近衛府の侍童又は少将を刺殺儀となす、先帝の御生所屬より移して之を新帝とじ、御同殿の場合には、内侍より直に帝によるの例なり踐祚の儀を行ひたまふ時日については皇位は一日もむなしすべからざるの大義に照し、天皇の御父は該位の即日之を行ひたすことを正例としてせよといふ。

多によれば踐祚の儀は皇位を一日も空位としなすといふ目的としているといふ。先づ「若く指摘しよう」といふように、奈良時代後期から桓武天皇即位まで、皇位懸絶には幾々なく見られるが、踐祚の儀の文、踐祚の御抑ひの儀は奏出されたる可能性も否定できないものではなからうか。

② 少納言 人が大舍人等を率いて広田御櫓を奉持して退ける。
 ③ 近衛 近衛が近衛を率いて伏願御櫓を奉持し、阿所(今山崎)に進る。
 ④ 今上 今上が大舍人・園司等を率いて、印籠を奉持して今上御所に進る。
 ⑤ 今上が香宮坊に御す。諸將の警備・侍衛は常例通りである。(「諸將」は儀式の成立と関連し、新帝の上表を中心に、「神道史研究」通二七六号)

以上が諸國の形式次第である。

賀言する所は、いかにもないが、まず天皇は讓位に先立ち、御衣を離れ、御在所に移られる。讓位當日、天皇、皇太子が殿上に上り、諸國儀が行われる。皇太子が起立すると、讓国の宣命が宣せられる。ここで即位された新帝が殿上を降り排舞し、歩行してお帰りになる。内侍が節制愛持し、少納言人が伝国體標を奉持して追従したのである。右國體標の姿を見てみると、皇太子は坊から先帝の御所の奥所に参入し、劍舞等、承継の儀が行われたのである。こうした儀式は、佐賀県八木町の渡御について、古く天武天皇時代以前には行われていたといふ（讓位の儀、佐賀県史稿、第六卷第二、二〇八）。

を中心に「神道史研究」第六卷第二、二〇八）

四、鑑とはなにか

さて「三朝の御鑑」とは八咫鏡、草薙劍、八咫瓊杵を指すところであるが、「神籙之鏡劍」といわれるように、元來神籙は鏡劍の形容語であつたと考えられたが、井上光貞氏等では（前掲）「使つてき玉尊であらう、そのもと、劍籙等承継の儀によつてつくる鑒」としてあるか。八咫瓊杵玉であらうか。しかしながら、この時点で源氏によつて新帝に奉呈されたいことから考へ、恐らくさうではなまい。鑑とは公名（四〇）奏に、

天子の神璽、璽はく群祥の日の旁の璽をいふ。璽として用ゐられず、

とある内印ではなからうか（訳注日本書紀下巻元元三年三月十五日癸丑、集
英社、二〇〇三）となす内印が「天皇璽」と題されてゐるため、これを「天子の
神璽」と見る時もあるが、実用には用ゐないといふ公文にある以上、実用に用ゐられてい
る内印を「天皇璽」とは考えられない。なお、藤弘道氏は「律令國家及び氏の研究
（吉川弘文館一九八二年）の中の「三種神器について」、内印と相違し法の規定が
見られないにせよ、勾玉を神璽と云ふ方がよいといふ。一方、平城京から字
多天皇までの歴史を詳細に検討された小川宣彦氏は、「群祥で奉られる神璽、印もし
くは玉と鏡を含むもの、群祥とは恒式玉に類し、空位位璽を無くし、司馬的連やに皇
位の後継を図るため、奏出された新たな空位位璽即ち古くからの空御即位禮様ではな
く、皇位の即位であったとは考えられるのではなからうか」として、この儀式は武天皇の

